終焉ノ栞
シュウエンシオリ
著：スズム
主犯：150P
イラスト：さいね／こみね
MF文庫J

終焉ノ栞
シュウ
エン
シオリ

終焉ノ栞
D
B
A
C

孤独ノ隠レンボ

ニセモノ注意報

完全犯罪ラブレター

猿マネ椅子盗りゲーム

終シユウ焉エン ノ栞シオリ

スズム

口絵●さいね
本文イラスト●こみね
主犯●150P

Contents

「――また、ありきたりな話か」

犯行声明

　物語の始まり。開ける幕。

　窓の外は曇くもり空。まだ夏も始まっていないこの季節。囁ささやかれるひとつの噂うわさ話ばなしがあった。

　詳しくは誰も知らない。いや、誰も知ってはいけなかった。

　ただ、空からっぽの本と猫の栞しおりを見つけても、決して触れてはいけないとだけ言われていた。

　──それが終シユウ焉エンノ栞シオリ。

終焉ゲームのルール

　ひとりの裏切り者「キツネ」によってゲームは始まった。

　抜け出したければ以下の条件に注意をし、終焉を迎えよ。

　━━さあ、楽しい終焉ゲームの始まり始まり。

・ゲームの終焉を迎えるには「キツネ」を殺せ。

・「キツネ」を見つけることが出来なければ、それ以外は死ぬ。

・「キツネ」を探しながら、こっくりさんのお願いに従え。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

・このゲームは終焉を迎えるまで絶対に抜け出すことは出来ない。

『ニュース速報です。

　本日、○○市の高校で男子生徒が遺体で発見されました。

警察は、事件と事故の両方の可能性があるとして捜査を進めております──』

無機質なアナウンサーの声が狭い部屋に響き渡る。

世界が回っているような、目眩めまいに近い症状に襲われた。

*

事件の概要は以下の通り。

それは、昼休みの終わり頃に起こった。

第一発見者は同学校の女子生徒。

グラウンドの方から転がって来たボールを拾うため追いかけて行った生徒は、茂しげみの陰かげに立っていた人物に気が付かずぶつかってしまう。

その衝撃でその人物は倒れる。

慌てて女子生徒は謝ろうと顔を上げたところ、異変に気が付いた。

──ぶつかった人物は上半身が無く、下半身だけだったのだ。

女生徒の証しよう言げんによると、彼女がぶつかるまでそれは確かに自立していたという。

さらに同時刻、グラウンドとは校舎を挟んで反対側にある裏門。

こちらの第一発見者は同学校の男子生徒。

裏門のすぐ前を通り、物置小屋に掃除用具を片付け、再度裏門の前を通ろうとしたところで異変に気が付く。

──裏門の前には、先程までは確かに無かった、上半身だけの死体があったのだ。

地面には、数メートルに渡って引ひき摺ずるように移動した跡が残されていた。

ちょうどそれは……下半身に向かっているような配置になっていたという。

当然、昼休みでグラウンドにも校舎にもたくさんの生徒が居たのだが、誰一人として犯人を目撃した者は居なかった。

つまりこれは、学校という密室で起こった、密室殺人だ。

『……ホントだったんだ』

その日は緊急集会が開かれ、学校はすぐに休校となった。

生徒達たちは現実感の無いまま、すぐに下校を余よ儀ぎなくされた。

しかし事じ情じよう聴ちよう取しゆの為ために残っている生徒や、親の迎えを待っている生徒など、すぐに全ての生徒が学校から居なくなったわけではなかった。

旧校舎の二階、元々音楽室として使われていた教室に、数人の生徒が集まっていた。

どの生徒の顔も恐怖に引きつっている。

それは、他の生徒の漠ばく然ぜんとした恐怖とは違う、切せつ迫ぱくした表情だった。

「──ねえ、誰が教えたの？　──誰が裏切り者なのよ！」

「私達も死んじゃうのか、な……」

「……落ちつけよ」

「これが落ち着いていられるわけないじゃない！」

「……まだ……わかんないじゃないか……偶ぐう然ぜんかも、しれないし……」

「これが偶然なわけないでしょう⁉」

「落ちつけって‼」

「…………」

「…………これ以上詮せん索さくして……死にたくないだろ？」

「──っ‼」

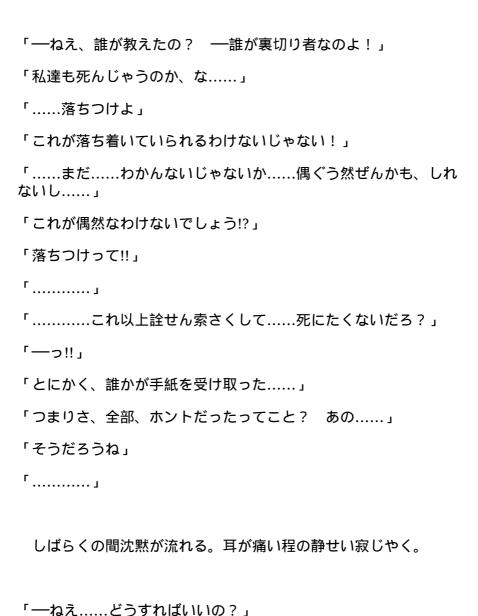
「とにかく、誰かが手紙を受け取った……」

「つまりさ、全部、ホントだったってこと？　あの……」

「そうだろうね」

「…………」

　しばらくの間沈黙が流れる。耳が痛い程の静せい寂じやく。

「──ねえ……どうすればいいの？」

「とりあえず、様子見しかないんじゃないかな？　誰かにはすで

に、手紙が届いてるってことだから……」

「うん、だから、あと一週間もすれば私達の誰かが死ぬ」

「こんな、こんな事件だし、すぐに犯人、見つかるよね!?」

『………………犯人なんて、居たらね』

CHAPTER 1
孤独ノ隠レンボ

制作者:A弥

CHAPTER1

孤独ノ隠かくレンボI　□退たい屈くつ凌しのぎー

「……つまらない」

　誰も居ない七時二十一分、空からの空間に吐き捨てた。

　無論、返事など返ってくるはずがない。

　両親は朝早く会社へ向かうため、僕が学校へ行く時間には、家の中には誰も居ない。

　そんなこと三年も前からわかりきっていた。

「──またか」

　誰も居ない空間で、誰かに聞こえるように口に出した。

　しかし、僕の声は空中分散し、塵ちりにもならず消えていった。

　ここ数日間、常に誰かの目線を背後に感じていた。

　振り返ってみてもなにも無い。

　ただ廊ろう下か奥には使い慣れたトイレの扉とびらが見えるだけ。

　やけに古ぼけて軋きしむドアが、妙にそれっぽさを演出していた。

　これは恐怖なのだろうか？

そんなことが頭に過よぎった。

　人間、未知の生物との遭そう遇ぐうや、未知の体験よりも恐怖することなんかない。

　冷静に考えると僕はここ数日、恐怖によって疲ひ弊へいしていた。

　しかし、それと同時に、それはひどく快適な刺激として、僕の生活を潤うるおしていた。

「何かこれまでに経験したことのない事態だ……」

　そう考えるだけで、恐怖と同じだけの興奮を覚えることが出来た。

　人間の好奇心とはなかなか侮あなどれないものだ。

　二に律りつ背はい反はんの感情が、僕という人間に恐怖という快楽を教えてくれる。

　━自己分析をもって、百点の点数をつけることの出来る回答が、人にはそれぞれあるのだそうだ。

　僕にとって、そんな自己分析の回答は「根暗」である。

「……行ってきます」

　誰に言うでもない言葉を玄関先でポツリと呟つぶやく。

　つまらない日常を今日も乗り越えるための、僕の小さなおまじないだ。

　曇どん天てんの空から垂れる雨が、アスファルトを濡ぬらし、水たまりをつくる。

──街の雑音は雨音に吸い込まれているようだった。

　携けい帯たい電話をいじりながら、決して誰とも目を合わせないように、うつむきがちに歩く。

　水たまりに反射する自分自身と目が合った。

　ひどいクマに、ボサボサの頭。丁てい寧ねいにアイロンがけされた制服と相まって、頭部の見栄えがより一層陰いん湿しつなものに見えた。

　つまらない、この世の中は、この日常は、まったくもってつまらない。

　このつまらない世界を誰かがどうか、壊してくれないか。

　──今日も、そう呪文のように思いながら、学校へと歩みを進める。

「ようＡエー弥ヤ！」

　背後から僕の名前を呼ぶ声が聴こえる。

　高く澄すんで、良く通る声だ。

　振り返るとクラスメイトがこちらに向かって小走りで寄ってきているところだった。

「相変わらず、今日も不機嫌そうだな」

　常に元気のいいこいつはクラスでも人気者だ。

　そんな人気者が、なぜ僕なんかに絡むのか。

　僕だけに絡むのではなく、こいつはみんなに絡むやつなんだ。

毎日楽しそうに生活をしているこいつのことが、僕は正直嫌いだった。

「大きなお世話だよ」

　ぶっきらぼうに返事をする僕に、「相変わらずつれないな」と笑いながら話を続けた。

「──そういえばお前さ、噂うわさ話ばなしとか詳しかったよな」

　来た……脳内の神経に電流が流れるのを感じる。

　落ち着け、冷静にだ。そう言い聞かせると自分の本来の楽しみを思い出すことが出来た。

　最近は恐怖体験に身を焦こがしている僕だが、一つだけ楽しいと思える趣味をもっている。

　それが、噂話だ。

　といっても、僕はただ噂話を聞くだけの奴やつらとは違う。

「ん？　何かあった？」

　僕が興味を示したことが嬉うれしかったのか、彼は嬉き々きとして話し始めた。

「いや、隣のクラスにＢビー子コって居るじゃん？　お前、仲良かったよな？」

　Ｂ子は学校でもトップクラスの美人と言われる女子だ。

うちの学校では知らない人間の方が少ないだろう。

　茶色がかったショートの髪型、それにぴったりと合った快かい活かつな性格。

　桜の花びらを張り付けたように淡あわいピンク色の唇くちびると、目が合うだけで引き込まれてしまうようなまっすぐな瞳。

　グラビアアイドルのようなスタイルに、かわいらしいアニメ声。

　しょっちゅうスカウトされるという話にも、誰もが納得してしまう程の美人。

　あまり人付き合いが得意でない僕が、そんな人物と仲がいいのにはある理由がある……。

「ん～そうでもないけど、Ｂ子さんがどうかしたの？」

　そう聞くと、彼は照れくさそうに笑みを浮かべた。

「いや、あいつにほら、好きな人とか、彼氏が出来たとか、そんな噂無いかな～って」

　ここまでは想定内だ。

　学校の男子のほとんどがその手の噂を欲している。

　一体、あんなやつのどこがいいのだか……。

　──しかし、その状況は実に、僕にとっては好都合だった。

「そういった話は聞いたことないから、たぶん、彼氏なんて居ないんじゃないかなぁ？」

「……そ、そうか！」

「それに、もし彼氏なんか出来たら、それこそ学校中の噂になってると思うよ」

「そ、そうだよな！　よーし……」

「……あ、でも」

「──ん？」

彼は自分にもチャンスがある、と言いたげな顔をした後に、突とつ如じよ眉まゆをしかめた。

　もう、僕の目標達成までついそこまで来ているのを実感する。

　──ここからが腕の見せ所だ。

「な……なんだよ？　どうした？」

「……いや、彼氏とかじゃないんだけど、Ｂビー子コについて、本当に奇妙な噂を聞いてね？」

「……え？　え？　マジ!?　どんな？」

「──いや、それが面白いんだけどさ、Ｂ子のニセモノが現れたらしいんだよ」

　……実に荒こう唐とう無む稽けい。しかし、それだけに面白い。

「に、ニセモノってどういうこと？」

「いや、馬鹿らしい話だよ。気にしないで──」

「いや！　Ａエー弥ヤ！　ここまで来たら教えてくれよ！」

　──ほうら、食いついた。

　精神を落ち着けて、ポーカーフェイスに徹する。

　最後の仕上げが重要だ。

「う～ん……じゃあ、誰にも内緒だよ？」

誰にも内緒。噂うわさ話ばなしを広げるための最後の一押しがこれに限る。

人間、誰しも、こいつには言っていいという人間が数人は居る。

まして社交性の高いこいつのことだ、すぐにそいつらには話してしまうだろう。

……同じく、「誰にも内緒」という前まえ口こう上じよう付きで。

それが噂を出所不明なものとし、「まことしやかなもの」として広げさせるのだ。

「何人か目撃してるらしいんだけどさ、その中で一番有名なのがＢ子のクラスメイトの話なんだ……」

「うん」

「部活終わって夜遅く帰ってたら、バスの中からＢ子が見えたらしいんだ。その子の家って、Ｂ子の家とは真逆の方向だから「おかしいな」と思ってメールしたらしいんだよ」

「……うん」

「『あれ？　Ｂ子何してるの～？』って、そしたらすぐに返信があって、それが『何って、家で勉強してるよ？』だったんだって」

「それって……たとえばＢ子が嘘うそついてるとか……」

「いや、それが、その時Ｂビー子コは近所のクラスメイトと一緒に、確かに家に居たんだって」

「……」

「まあそんな話が他にも何回かあって、どうやらＢ子のニセモノが徘はい徊かいしてるんじゃないかって、そんな噂なんだ」

「……なんだよ、なんか、お化けとかそんな感じ？」

彼は目を輝かせて、僕の次の言葉を待っている。

これが、これこそが僕の快感の一つだ……！

「……どうだろう？　そういうオカルト的なことはわからないけど、これだけ目撃されていれば、あながち全てが嘘うそとは限らないのかもしれないよね」

「……だよな！」

「まあ、にわかに信じられないような話だけどね」

　興味の無いそぶりを見せながら、心の奥底では笑いが止まらない。

　学校につくと、いつもは暗い表情の校門が今日だけは笑顔に見えた。

　僕にとってそれは、良い一日の予よ兆ちょうだとしか思えなかった。

　──たとえ、他の人にとっては凶きよう兆ちょうだろうとも。

　　　　*

　午前の授業が終わり、クラスは思いがけない程のざわつきを見せていた。

　噂の流れは予想以上に早いようだ。

　僕は出来るだけ目立たないように、息をひそめる。

　誰もが僕には注目せず、誰もが僕の話には注目している。

『それが作り話とも知らずにね』

授業の間、手紙の往おう来らいがひどく激しかった。

いつもは日に一回背中をこづかれればいいものの、今日はすでに六回こづかれている。

開かなくてもわかる手紙の中身が、僕を超能力者なのだと錯さつ覚かくさせる。

今さらながら話すと、僕の趣味は生徒達たちの「あらぬ噂」を作りあげることだ。

時には携けい帯たいで学校の裏サイトに忍び込み、時にはチェーンメールで、時には女子の手紙を偽ぎ造ぞうして……。

そうやって僕はあらぬ噂をたて、興味本位に動かされた大たい衆しゆう達の話の膨張を、文字通り傍聴してきた。

自分の作る物語が、まったく違う形で世間に影響を与え、僕の考え通りに事が進むのは実に楽しい。

現実は舞台だと言った偉い人じんがいたようだけど、僕はさながら脚本家だ。

人の物語にその人だけの悲劇を、観客にとっての喜劇を演出する。

その様相がたまらなく好きだった。

結局、すべての噂うわさ話ばなしなんて、嘘うそを本当に変える幻想に過ぎない。

この世の中で真実と嘘なんてものが誰にわかるだろうか？

あるのは、「真実っぽい」ものと、「嘘っぽい」ものだけなのだ。

噂話は、その境界線上をゆらゆらと揺蕩たゆたう。

だから人は噂が好きだ。そして、僕も噂が好きだった。

ざわつく教室は相変わらずで、携帯をいじりながら聞き耳をたて

る。

　クラスで人気の女子グループは語っていた。

「確かに私も見た」

「優等生っぽいけど、夜な夜な遊び歩いているらしい」

「どちらがニセモノ？」

　……くくっ。さすがにＢビー子コの話題はみんな食いつきがいいな。

　携けい帯たい電話の液晶を確認した後、満足気な笑みをかみ殺しながら、机に突っ伏して寝たふりを決め込む。曇くもり空が崩れて雨が降ってくると、心地よい雨音が噂話と混ざって、まるでテレビのノイズのように聞こえてきた。

　僕はそのままの体勢で、急激に襲ってきた睡魔に身を任せてしまうことにした──。

「□□Ｂ子のやつ、怒ってるだろうな」

孤独ノ隠かくレンボII　□無む邪じや気きな憧しよう憬けいー

　放課後、クラスメイト達たちが部活だのなんだのに向かう中、僕は帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　一階の渡り廊ろう下かから、裏庭を抜け、少し外れたところに旧校舎がある。

　老ろう朽きゆう化かが進み、今はほとんど使われていない二階建ての木造建築物。

　その二階にある、元音楽室の扉とびらを開くと、そこにはすでに普段と変わらぬ顔が揃そろっていた。

「……やあ」

　僕は何食わぬそぶりで机の一つに荷物を置く。

　遠くからは、運動系の部活のかけ声が響いてきた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　怒りを必死に抑えるような表情で僕に睨にらみ寄ってくるのは、学校でもトップクラスの美少女であるＢビー子コ。

　普段は優等生で明るくて、誰にでも人当りがいい彼女だが、この教室の中ではそんなことはなかった。

「ほうら、火の無いところには煙けむりが立たない。僕はちょっと

したおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「──でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　僕の胸倉を掴つかもうとするＢ子に向かって、そんな素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

　長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、僕と同じで「根暗」そうな印象を受ける。

　──彼女の名前はＤデイー音ネ。

　いつもの面子の一人だ。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ？」

　Ｄ音は屈くつ託たくの無い笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　しかしＢ子は「やれやれ」という表情で、先程まで自分が座っていた椅い子すへと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢビー子コはＤ音に弱いね」

「うっさい」

　先程までニコニコとした表情で僕らの掛け合いを眺めていたＣシー太タが、話に割り込む。

　色素が薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂れ目。

　おそらく「イケメン」の部類に入るであろう彼は、人を茶ちゃ化かすのがとてもうまかった。

「Ａエー弥ヤだって、何も無意味な嘘うそをついたわけじゃないじゃないか」

「そうですよ、私達たちの活動趣しゆ旨しに非常に合ってると思います」

「活動趣旨とか……そんな大たい層そうなもんじゃないでしょうが」

　そう、一見バラバラでまとまりがなく、自分とは相あい容いれないような人間である彼らだが、ひとつだけ共通点がある。

　──それは、彼らもまた、極度の噂うわさ話ばなし好きだということだった。

　噂……といってもその内容はほとんどがオカルトや都市伝説に分類されるものだ。

　やれ〝口裂け女〟だの、〝人じん面めん犬けん〟だの……。

　そういった噂話を語り合っているうちに、次第にこの旧校舎へと集まるようになった。

　部活でも同好会でもなく、ただ単に集まって話すだけ。

　日にちが決められているわけでも、ノルマがあるわけでもない。

　仲がいいわけでもなんでもなく集まるというのは、周りからすると気味が悪いと思われるかもしれないが、少なくとも自分にとってみれば余計な関心が無い分、居心地が良かった。

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　僕は唐とう突とつに切り出す。

「気のせいなのか、もしくは何かの怪かい奇き現象なのかもしれないけど」

「……怪奇現象？」

　Ｂ子はガタリと椅子を立ちあがると、こちらに向いて座り直した。

「そう……最近朝起きるとね、確実に誰かからの視線を感じるんだ」

「家族……とかではなくてですか？」

「うん、両親は早く出かけるからね」

「じゃあ誰かが外から見てる～とか？」

「そういうのじゃなくてもっとこう、背後からの視線を感じるんだよね……。振り向いてみても何も居ない、そういうことが頻ひん繁ぱんに起きてるんだ」

「……ふーん」

　──これは、実際のところ本当の話だ。

　しかし、安あん易いに「嘘うそだろう」と言わないのも、この面子のいいところであると思う。

　先程まで僕の嘘によって噂をたてられていたＢ子ですら、真剣に考えている。

　つまるところ、こいつらは噂の楽しみ方を知っているのだ。

　いや、単なる暇人なのかもしれないが……。

「〝座ざ敷しき童わらし〟とか、そういったものかな……」

「〝メリーさん〟だったら電話とかかかってくるんだよね？」

「最近のメリーさんはＳＮＳとかも使うらしいよ」

「うーん……」

　僕はひとつ呼吸を置いてから、さらに続ける。

「ひとつ、気になることがあるんだけど」

「なに？」

「この間、こっくりさんをやったじゃない？　僕とＢビー子コとＣシー太タの三人で……」

「ああ……」

「──翌日からなんだよね、視線を感じるようになったの……だからこれは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

　長い沈黙。

　それぞれが、いろいろなことを考えているのか、何とも言えない表情をしている。

　これは、『終焉ノ栞』という言葉が僕らにとって、今一番の話題であることと、その噂の特異性からくるものだった。

『終焉ノ栞』

　この話は、どちらかというと「学校の怪談」に分類される話かもしれない。

　どのサイトで調べても出てくることがない、この学校にだけ伝わ

る……本当の噂うわさ話ばなし。

　噂によると、この学校のどこかに『終焉オワリノ本』と『終シユウ焉エンノ栞シオリ』というものが隠かくされているらしい。その本にはこの世の中のありとあらゆる噂話が記載されており、栞の挟まっているページを開くと、その噂が現実のものになってしまうというのだ。

　噂だけ聞くとなんてことはない。しかし、僕達たちにとってこの噂が他の噂とは違い、重要なことには理由があった。

　—どうやら、この本と栞は存在するらしいのだ。

＊

　ちょうど十年程前、この旧校舎が実質的に使われなくなったその年、この学校で不可解な連続殺人が起こっている。

　これは、新聞などにも載のっている事実である。

　どの先生に聞いても、不自然な回答しかしてくれない。

　しかし、この学校のどの生徒も一度は耳にしたことがある有名な話だ。

　なぜそんな前の事件について、ほとんどの生徒が知っているかというと、それはもちろん事件がまるで怪談のような形で語かたり継つがれているからである。

—あの事件も……彼らが『終焉ノ栞』を手に入れたからだ。

そんな風に、終焉ノ栞の噂話は、十年前の事件と共に語られることが多い。

　今考えなおしてみると、僕らが噂話について特に興味を持ったのも、こういった環境からくるものかもしれない。

　ともあれ、僕らの活動のひとつの目標は、『終焉ノ栞』の謎を解き明かすことだった。

　そんな中、つい一週間程前、ひとつのノートを旧校舎で見つけることになる。それは、かつて旧校舎を使っていた生徒による、交換日記のようだった。

　みんなでそれを読み進めていくうちに、ある事実に気が付くことになる。

　――これは、十年前に死んだ彼らの交換日記だ。

　彼らもまた、噂話を集めるのが好きな生徒の集まりだったようだ。

　今とはまったく違った学校の噂話に、僕はこれまでにない程興奮したのを覚えている。

　そして、そんな中に「終焉オワリノ本」と「終シユウ焉エンノ栞シオリ」を手に入れる方法が書いてあった。

『あるルールに従って』こっくりさんを行うことで、手に入れることが出来、彼らはこれを実際に手に入れたと書いてあったのだ。

　その日以降の日記は破は損そんしており、読むことが出来なかったが、確かにその本と栞は存在すると、そう書かれていた。

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

「失敗って……」

「『終焉ノ本』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が再び静せい寂じやくに包まれる。

　僕が何を言うか、それはきっとみんなわかっていたと思う。

「……もう一度やろうよ」

　そう、口に出してみた。

　みんなが僕の方を見ている。

　これは、勘違いかもしれないけれど、期待するような眼めで、僕の方を見ていた。

*

　そして、僕達たちはこっくりさんを始めた。

　やり方はよくあるこっくりさんとそう変わらない。

　Ａ３サイズくらいの紙の真ん中に鳥とり居いを描き、その左右に「はい」「いいえ」を書く。その下に右側から並べて「あいうえお・かきくけこ……」と五十音を書き、さらに数字を一～十まで書く。

　コインは僕が持っていた十円玉を使うことにした。

　みんなで十円玉に人差し指を置いた。人数が多いので、少し指を置きづらい。

　カーテンを閉め、部屋を真っ暗にして、テレビをつけてその明りだけで行う。

「こっくりさん、こっくりさん、もしおいでになりましたら、「はい」の位置までお進みください」

　十円玉はゆっくりと「はい」の位置まで動いていった。

　ここまでは前回と同じだ。

　前回はこれ以上進めるのが怖く、ここで終了させてしまっていた。

「それではこっくりさん、鳥居の位置までお戻りください」

　ゆっくりと鳥居の位置まで戻る十円玉。

「これから、みんなにひとつずつ質問をしていく。まずは誰か、僕に質問して？」

「……じゃあ、Ａエー弥ヤの昨日の晩ばん御ご飯はんは肉である？」

「……なにそれ？」

「……だって、突然質問って言われたって」

「あ、動き出した」

「…………「はい」だって……何食べたの？」

「ハンバーグだけど……」

「じゃあ合ってるね……こっくりさんこっくりさん鳥居の位置までお戻りください」

「次はじゃあ、Ｂビー子コね……Ｂ子に好きな人は居ますか？」

「ちょっ！　ちょっとなに聞いてるのよ！」

「ほらほらＢ子ちゃん、落ち着かないとダメだよ？」

「……あ、あ……もう……」

「「はい」だって……ふーん……」

「ちょっとＡエー弥ヤ！　聞いといてなんでそんな反応なのよ！」

「よく考えたらそんなに興味無かったから……あ、こっくりさんこっくりさん、鳥とり居いの位置までお戻りください」

「……!!　つ、次はＤデイー音ネ行くわよ！」

—こんな感じで、こっくりさんは進んで行った。

しかし、結論から言うと僕らは、失敗してしまった。

それも……最悪の方法で。

そのせいで僕らはゲームに巻き込まれることになってしまった。

最悪の、終シユウ焉エンゲームに……。

*

翌日、僕は寝不足でいつも以上に不機嫌だった。

昨日「あんなこと」が起こったからだろうか？　家に帰ると、いつも以上に視線を感じるような気がしていた。

僕はすぐさま部屋に入ると、電波状況のせいで圏外と表示されたままの携けい帯たい電話を持ち、胎たい児じのように膝ひざを抱え、震えながら布団ふとんに潜もぐり込んだ。そうすると、逆に視線が近く感じるような気がして、なんども布団を出ては周りを確認したり、テレビをつけたり消したりの繰り返しをしていた。

—結局、気が付くと朝になっていた。

「おーっす！　Ａ弥～！」

　靴くつ箱ばこに着くと、相変わらずの能天気な声が聞こえてきた。

　こいつは今日も僕に絡んでは、いくつかの話のネタを聴きだすつもりだろうが、今の僕はそれどころではなかった。

「……何？　今日は僕体調が……」

「──ん？　それなに？」

　突とつ如じょ僕の靴箱の中から手紙が落ちてきた。

　僕はすぐにそれが、良くないものである、ということがわかった。

　その手紙を彼が拾う。しかし、僕はすぐにそれを取り上げはしなかった。

「おおー！　もしかしてこれって、あれ？　ラブレターとかそういうの!?」

「……あ、おい」

「な？　誰からなの？」

「やめろって……」

「いーじゃん、ね、俺にだけちょっと見せてよ、な？　な？」

　僕は少し考えてからその言葉を吐いた。

「……しょうがないなぁ……誰にも内緒だよ？」

　そいつは手紙を嬉き々きとして開くと、途と端たんに顔をしかめてこう言った。

「……………………………………………………………………………………

なんだよこれ？」

「──っ！」

　僕は彼のその言葉と表情がどういった感情からくるものか理解出来ず、ただ茫ぼう然ぜんとした。

　彼はブツブツと呟つぶやいて僕に手紙を渡すと、まるで生気が抜けたようにフラフラと渡り廊ろう下かを歩いて行った。

「……お、おい……」

　──そして、昼休み。あの事件が起こった。

　　　＊

　学校から帰ってくると、すぐに部屋にこもった。

　学校は一週間の休校になったらしいが、僕は学校になど行ける精神状態ではなかった。

　両親も、クラスメイトが死んだという状況が状況だけに、僕が部屋から出てこないことを心配しつつも、過度な干かん渉しようを避さけているようだった。

　数日間部屋にこもって自問自答を繰り返す。

僕があいつを殺してしまったのだろうか？

……一体、誰がこんなことを……！

……カタッ

無機質な音が部屋に響き渡る。

僕はぼーっと部屋の中を見渡した。

部屋の中に見たことの無い本を発見する。

「しゅ……」

理解した瞬間血の気が引いた。

声に出してしまうと、誰かに気付かれるんではないかと自分の口を必死に塞ふさいだ。

まるで、自分の体が自分のものじゃなくなったような感覚に陥おちいった。

真っ黒な本に黒猫が描いてある栞しおり……。

そう。終焉オワリノ本と終シユウ焉エンノ栞シオリがそこに。

「──本当にあったんだ」

もしこのときの僕を客観的に見ることが出来たら、どんな奇怪な表情をしていたのだろうか。喜びが体全体に浸しん透とうする前に、死んだクラスメイトの顔と旧校舎のあの空気が全てを支配した。糸が切れた様に布団ふとんの中に潜もぐり込み、携けい帯たい電話の画面を開いた。

「冷静に……冷静に……冷静に……れいせい……に……」

　誰かに気付かれる不安など忘れ落ち、感情が脳内でゲシュタルト崩壊を起こししながらも自分に言い聞かせるため、ただひたすら、メール本文に打ち込む。

　ずっとずっと……ただただひたすら。

　未送信フォルダに保存され、どこにも届くことのない僕の感情は、普段からそうしていることもあって、容量がすぐにいっぱいになってしまった。

　━どれくらいの時が経たったのだろうか。

　寝落ちてしまったのだろうか？

　自分でもよくわからない不思議な感覚に陥った。

　無表情に静せい寂じやくを保っていた外からは、雨音が聞こえていた。

　音は聞こえないが、布団の中からでも雷が光っているのがわかる。

　梅つ雨ゆが明けきらない終わりかけの季節。

　毎日毎日うっとおしくも鳴り続けた雨音が止やめば初夏の始まり。

　何か夢でも見ていたのではないか。

　雨音を聴きながらそう思った。

　さっきまで重くのしかかっていた布団が力を緩ゆるめそっと離れた。

「ふぅ……」

自分に聞こえるように大きくため息をついた。

　安あん堵どのため息だったのかもしれない。

『××××××』

　僕は再び身体を強こわ張ばらせる。

　そういえば昔、ネットで見たことがあった。

　目撃情報があるのに、テレビ局に問い合わせても何もわからない臨時速報があると。

　その放送は、その日亡くなった人と次の日亡くなる被害者のリストが映っているらしい。

　雨音だと思っていたものはテレビから出るノイズ音だった。

　雷光だと思っていたものはテレビから出る映像の光だった。

　ただの噂うわさ話ばなしだと思っていた。

　よくある都市伝説の一つなのだと──。

　僕はこれまで、何一つ信じていなかった……。

『××××××』

『こんばんは。臨時放送です。これまでの犠ぎ牲せい者しやをお伝えします』

『今日歩きながら携けい帯たいを見ていた人』

『生活が寂さみしくて和室にうさぎを飼った人』

『万歩計で、一万歩歩くのを達成した人』

『人の手紙を覗のぞいてしまった人』

『続いて、明日の犠牲者をお伝えします』

『ずっと気になっていたことを本人に直接伝えた人』

『お願いを無視した人』

『学校をサボり一人で遊んでしまった人』

『──今、青ざめてる人』

『明日の犠牲者はこの方々です。ご冥めい福ふくをお祈りいたします。……おやすみなさい』

　無機質なアナウンサーの声が狭い部屋に響き渡る。

　デジャヴというのだろうか。

　淡々としゃべる声がひどく残ざん酷こくに聞こえた。

　小さく風が吹いた。

　ペラペラと終焉オワリノ本が音を立ててめくれ上がり、栞しおりが挟まっているページで止まった。

　──ひとりかくれんぼ　制作者：Ａエー弥ヤ──

　気が付けば手紙を受け取って、もう期日の一週間に近づこうとしていた。

　──面白い、やってやろうじゃないか、実行すれば死にはしないんだ。

　僕は鞄かばんの奥の奥にしまい込んでいた手紙を取り出すと、そこに書いてあることを実行に移すことにした。

手紙にはひとりかくれんぼのルールが書かれていた。

　まずは、手足があるぬいぐるみを用意せよ。これは、僕が小さい頃に人からもらって、いまだになぜか捨てることの出来ないうさぎのぬいぐるみを使用することにした。

　愛着がある……というよりも、捨てるのが怖いという理由で長く持っていたぬいぐるみ。

　次に、お米を用意する。

　台所に降りると、書き置きと共にご飯が用意されていた。

　時刻は午前３時。両親はどこかに泊まっているらしく、家には居ないようだった。

　またしても、背後からは視線を感じる。

　いつもよりも、強烈な、感情の籠こもった視線。

「……またか」

　そのまま台所で塩水を作りコップに用意すると、両親の寝室へと向かった。

　そして、縫ぬい針と赤い糸、ハサミとカッターナイフを手に入れる。

これからは、ゲームを始める前の段階に入る。

　ぬいぐるみの腹を切り割き、綿を取り出す。

　僕は無表情なまま、一連の作業を行っていた。

　映画か何かで、人をバラバラに切り刻む主婦の話をやっていたが、その時も彼女達たちは無表情だったなあ、そんな無関係なことを思い出す。

　そして、詰め物の代わりにお米と自分の爪を切って入れ、へたくそに縫い合わせる。

　ぬいぐるみの手や足、口にも赤い糸を縫い合わせてみるが、見た目だけで、とてもグロテスクなものに見えた。

「まるで、血管みたいだな」

　僕はポツリと呟つぶやくと、次に、塩水を持ったまま、押し入れの奥にそれを持って行った。

　これは、隠れる場所に置いておくものらしい。

「あとは、ぬいぐるみの名前ね……」

　少しだけ考えてから、僕はあいつの名前をつけることにした。

「……さて、始めるか」

　僕は家中の電気を全て消し、カーテンを閉め、テレビだけをつけた。

　携けい帯たい電話は手離すことなく、ポケットの中に入っている。

「最初の鬼はＡエー弥ヤだから。最初の鬼はＡ弥だから。最初の鬼はＡ弥だから──」

　無表情のままそう告げると、浴よく槽そうに行き、風ふ呂ろ桶おけの中にぬいぐるみを沈めた。

　水が暗闇の中の僅わずかな光を反射させて、まるで生きているかのようにぬいぐるみの表情を歪ゆがめた。

　僕は少しだけ寒気を感じた。

　いつもの視線は感じるが、僕はもうそれを気にしなくなっていた。

　台所へと戻ると、出しておいたカッターナイフを手にとって、目をつぶり十秒程数える。

「もういいかい？」

　そう言うと、風呂場へ行って、桶おけを開け、ぬいぐるみを取り出し。

　──腹を刺す。

「次は×××が鬼の番。次は×××が鬼の番。次は×××が鬼の番……」

　僕はそう言うと、一度台所へと戻り水に濡ぬれたカッターナイフを置いた後、塩水を置いておいた押し入れの部屋へと戻った。

　押し入れの奥に入ると、いろいろなことを考える。

　──一体これに、何の意味があるって言うんだ？

—そもそも、一体誰が裏切り者だっていうんだ？　あのゲームはまだ、始まってはいけないはずだった。それなのになぜ？　何を間違えたというんだ？　これは、このゲームは一体、一体なんで……！

しばらく経たった頃、僕はそろそろぬいぐるみを探しに行こうと思い、口に塩水を含もうとした。

しかし、僕の耳に聞こえるべきではない音が響く。

ギッ。ギッ。

廊ろう下かに足音が響いていた。

誰も居ないはずの廊下に……なぜ!?

僕は息を殺して身を潜ひそめる。

足音は次第に近くなって来ているようだった。

ギッ。ギッ。ポタ。ポタ。

何かが垂れる音が聞こえる。

僕はしばらく耳を塞ふさぎ、気配が遠くなっていくのをただひたすら震えながら待っていた。

それから一体、どれくらいの時間が経ったのだろう。

それは数時間程かも、それとも、数秒のことだったかもしれない。

　僕は恐る恐る押し入れの襖ふすまの隙すき間まから部屋を覗のぞくと、そこに、あるはずのない物を見ることになった。

「──なんで君が……!?」

『──みーつけた』

そこから先の記憶はフラッシュバックのように断片的で、まるで音声のチャンネルが切れてしまっていたかのように、無音で流れていく。

　部屋の中にあったハサミを拾って身構えるが、身体を蹴られ、腕を踏みつけられる。

「無む駄だだよ」「×××××」

　そう冷たく言い放たれた。

　なぜ？　なんでなの……？

　君が、まさか君が犯人だったなんて……！

　彼は先ほど僕がぬいぐるみにしたのと同じように、カッターナイフを振り上げた。

　―ザクッ。

　意外な事に、叫び声などは出ないものなんだな、などと冷静に考えながら、薄れゆく意識の中で携けい帯たい電話を取りだす。そしていつものように、メール作成画面を開いた。

「え？　何？」

「聞こえないよ？」

　ああ、最後の最後まで、僕の声は届かないんだなあと、妙に納得したような気持ちのまま、僕の意識は…………………………………………………途絶えた。

『ニュース速報です。

　本日、○○市で男子生徒が遺体で発見されました。

　彼は部屋の中で身体からだ中じゆうを刃物によって刺されており。

　手には携帯電話が握られた状態でした。

　先日同市内で起こった不可解な殺人事件の被害者とはクラスメイトだということで、警察では同一犯による殺害の可能性があるとして、捜査を進めております――』

『――次は君の番だ』

CHAPTER2
ニセモノ注意報

制作者:B子

CHAPTER2

ニセモノ注意報I　□ある日の噂ー

──私は完かん璧ぺきだ。

「Ｂビー子コちゃんって、カワイイよね！」

「ね～アイドルみたいにスタイルもいいし」

「それに頭もいいし、性格もいいし……ホント憧あこがれちゃうなあ～」

「えー……そんなことないって」

「そんなことあるよ！」

「運動神経だっていいしさ！　部活入ってないのもったいないよ～」

「うーん……部活やってる人に比べたら全然だよ」

「そんなことないって。それに、男子にもすっごい人気だし」

「ねー！　でもＢ子だったらわかる～」

「私が男子でも告白するもん」

「あはは」

「で、で、誰か好きな人とか、付き合いたい人とか居ないの？」

「う～ん……そういうのよくわかんないからなー」

「えーつまんなーい」

「でもまあ、正直Ｂ子レベルの女の子と付き合える男子なんてそうそう居ないかもね」

「言えてる」

「とにかく、誰か好きな人とか出来たら教えてよね！　絶対！」

「うん。大丈夫だよ」

「約束だよ～！」

「絶対ね！」

「あ、やばい、もう授業始まるよ」

　──そう、私は完かん璧ぺきだ。

　完璧な、『ニセモノ』だ。

　人は、誰しもが「仮か面めん」を被って生きている。

　たとえばクラスメイトと話す時、先生と話す時、家族と話す時……。

　それぞれが違った表情になっているはず。

私はそれが他の人よりも、強固で完璧な仮面で出来ている。

思えば幼少の頃、親の都合で転てん勤きんが多かったことも理由のひとつだと思う。

敵を作らず、かといって暗いとも言われず……。

人にいかに好きになってもらえるか、そして、いかに敵を作らないか……そればかりを考える子供だった。

その集大成として今の完璧な私が居る。

……でも、これは「私」じゃない。

みんなが褒ほめて、憧あこがれると言って、頼って、好きになって、告白していく私は、本当の私とは全く程遠い人間だ。

　狡こう猾かつで、すぐに感情をむき出しにする。

　そういった人格が私の中には確実に居る。

「本当の私なんて誰も見ていない」

　いつしか私は、人に囲まれれば囲まれる程、孤独感を感じるようになっていた。

　そんな、本来の自分と周りの望んでいる自分とのギャップに悩み始めながらも、十何年間培つちかってきた処しよ世せい術じゆつというものはなかなか身体に染み込んでいるもので、高校生活もこれまで通り問題もなく、順調にスタートしていた。

　──しかし、ある時少しのイレギュラーが起こる。

　ほんの小さな小さな『噂』が、クラスのみんなの間に拡ひろがったのだ。

『Ｂビー子コって中学生の時はギャルだったらしい』

　こんな、たわいもない噂うわさ話ばなし。

実際に同じ中学校出身の生徒達たちによってそれは即そく座ざに否定されたが、その噂の拡がり方は異常なまでの速さだった。

　私はこれまでにない程の憤いきどおりを感じていた。

　私が作り上げて来た、鉄壁の仮か面めんを、そうやすやすと壊せると思うな。

　自分自身を犠ぎ牲せいにしてまで作り上げたこの『ニセモノ』を、覆くつがえすことが出来ると思うなよ！

　──犯人を捜し出してやる。

　私は、まったく噂の事などことにしないという素振りを見せながらも、噂の出所を探して動き始めた。

「変な話だね。でも、誰から聞いたの？」

　この問いに対してみんなの答えは曖あい昧まいなものだった。

　なんとなく。噂で。そういった答えばかり。

　予想以上に犯人を見つけ出すことは困難で、まったく成果を得られないまま、数日が過ぎようとしていた。

　しかしある日、学校裏のゴミ収集所へと向かうところで一人の生徒とすれ違った。

　ゴミの臭いが気になったのですぐに教室に帰ろうと思ったのだが、私は即そく座ざにその人物から出るわずかな雰ふん囲い気きに気が付く。

──そして、直観的に彼が犯人だと、そう思った。

「……ねぇ、ちょっと君」

「ん？　何かな？　Ｂビー子コさん」

「……えーと……はじめまして……だよね？」

「ああ、そうだねそういえば。いや、君みたいに有名な人だとさ、初めて話した気がしないものだね。ふふっ……僕はＡエー弥ヤ、よろしく」

　間違いない。こいつだ。

　そして、私が感づいていることも気付いて、隠かくそうとしていない。

「なんでかな？」

「……ん？　何がかな？」

「……なんであんな噂流したのって聞いてるの……」

「……ふーん……」

「──知らないとは言わせないから！」

　少しの沈黙。

　私の口調が荒くなったことと、それ以上に私の本性が顔に表れていたせいだと思う。

　彼は少し驚いた顔をしてから、すぐにまたニヤリと笑った。

「……悪かったよ。謝る。でも、君は思ってた以上に面白い人間みたいだね」

「うるさい。それよりも理由を教えなさいよ」

「……理由ねえ」

　ゴミの臭いに加え、彼の人を馬鹿にするような、世界を馬鹿にするような態度に次第にイライラして、すっかり口調が荒くなってしまっていた。

「ちょっとした調査さ」

「……調査？」

「そう、噂の拡ひろがり方の、ね。君の噂は抜ばつ群ぐんな拡がり方だったね」

「……どういうこと？」

「噂ってさ、内容もそうだけど、重要なのはその拡ひろげ方かたなんだよね」

「？」

「誰に、どういう順番で、どういう噂を拡ひろげさせるか、そこまで考えないと、噂は真しん実じつ味みを増さないんだよ」

「……真実？　噂なんてどこまで行ってもただの噂でしょ？」

「この世の中にあるのは真実っぽいものと嘘うそっぽいものだけだよ」

「……どういうこと？」

「まあ、とにかくこれは、僕のつまらない人生における唯ゆい一いつの趣味みたいなもんさ」

「あなたね、そんな悪趣味に人の事使わないでくれる？」

「うーん……どうかな、それよりなんで僕だって気が付いたのかの方が気になるんだけど」

　私は少しだけ考えてから、言葉を続けた。

「…………伊だ達てに人の顔色を窺うかがってきたわけじゃないから」

「……ははっ！　面白いね！」

　彼は堪え切れないというように顔を片手で隠かくすと、笑いながらそう言った。

　私は「しまった」と思いながらも、なぜだか彼には自分の本性を見せても大丈夫だという気がしていた。

「同じ穴のムジナってことかな……ベクトルは正反対だろうけど」

「……どういうことよ？」

「どちらも人の噂を気にして生きてきた。僕は人に気付かれないように、君は人とうまくやるように……まあ、僕の幼おさな馴な染じみと似てるっちゃ似てるけど、君のはもはや恐怖症のレベルだね」

「……人の事病気みたいに言わないでくれる？」

「さっきからチラチラと周りを気にしている。きっと他の人間が出てきたら、途と端たんにいつものＢビー子コさんに戻るんだろう？」

「…………」

「大丈夫。誰にも聞かれてないから。それじゃあね」

「……ちょっと！」

　──そうやって私はＡエー弥ヤと出会った。

　その後も彼は反省することもなく、何度か私にまつわるあらぬ噂を流した。

　それ以外にも彼の手によるものだろうという噂をいくつか聞い

た。

　そのどれもが憎らしい程に素晴らしい手際で、噂の発信源がどこかもわからず、どんなにオカルトな話題であっても信しん憑ぴよう性せいがあるもののように生徒達たちの間で拡ひろがっていった。

　私は何度か彼を問い詰めるうちに、何な故ぜか旧校舎の集会に参加するようになっていく。

　そこで私は一つのことに気が付いた。

　私はどうやら「オカルト」の類たぐいの話が好きなようだった。

　人生において何かに熱中するという事がなかった私だが、オカルト話を聞いていると胸の奥がワクワクとうずくのを感じる。

　この学校に過去実際に起こった、生徒変死事件を聞いた時には、不ふ謹きん慎しんにも恐怖とともに興味がわき、その二つの感情が私の肌を粟あわ立だたせた。

　まあとにかく、そんなこんなで私は現在、完かん璧ぺきなニセモノを常日頃演じつつ、「噂」を集める会の一員として放課後を過ごしている。

ニセモノ注意報II　□どこか違和感のある━

　━━ある日の昼休み。

　たまに息苦しさを感じると、屋上へとやってきて、ただ空を眺める。

　今日は生あい憎にくの曇どん天てん。曇くもりの日の空気は嫌な臭いがするので好きじゃない。

　ただその代わり、屋上に来る人は少なくなるので、そこだけは良い所だと思う。

　誰も居ない屋上で束つかの間まの休息……のつもりが、最近はそうもいかなくなっていた。

「Ｂビー子コちゃん～」

「……やっぱり居るのね……」

「え～偶ぐう然ぜんですよ～」

　にっこりと笑う彼女の名前はＤデイー音ネ。

　私とは違って小柄で、華きや奢しやで、長く綺き麗れいな黒髪が特とく徴ちよう的てきな女の子。

　なぜだか最近彼女は私が屋上に行くタイミングになると、屋上に居る。

　心でも読まれてるんじゃないかと怖くなることもあるが、彼女なりに私を気にしてくれているのかとも思うのでなんとも言えない。

　ちなみに彼女も放課後の旧校舎のメンバーなので、私の裏の顔は知っている。

「でもでも、いつもはＢビー子コちゃんと話すのもままならないから、こういうのは嬉うれしいです」

「なんで話しかけないの？」

「……だって、Ｂ子ちゃんの周りには、いつも人がいっぱいなので……」

「ん～……まあ確かにね～……」

　取り巻き……という程でもないが、確かに私の周りには常に誰かが居る。

　別のクラスのＤデイー音ネは確かに話しかけるきっかけが無いかもしれない。

　ただ、彼女はとても私のことを慕したってくれているように思える。

「あんまり気にしなくていいんだよ？」

「気にしてないです。ただＢ子ちゃんのこと好きだから、お話出来るとうれしいだけです」

　そう言って彼女はにっこりと笑う。

　彼女の長い髪が揺れて、シャンプーの香りがした。

　私は苦笑いをして、再び崩れてきそうな空を眺めた。

『□□Ｂ子のニセモノが現れたんだって』

　突とつ如じよ、屋上のどこかからそんな言葉が聞こえた。

　私達たちが居るのは屋上の、少し奥まった所にある小さな建物の

陰かげなので、話をしている人達からはちょうど死角になっているようだった。

『ニセモノってどういうこと？』

『なんかね、Ｂ子が家に居る間に夜に遊び歩いてるらしいよ？』

『え？　何？　お化け的な？』

『わっかんない。でもさ、Ｂ子イイ子だから、溜たまってそうじゃん？』

『溜まってるって何が!?』

『あははそういうんじゃないし！　でも溜まりに溜まった遊びたい欲求が～とか』

『何言ってるかわかんな～い』

『でもさ、ホント見た子が居るらしいんだよ～……』

　──私は直感的に、Ａエー弥ヤの噂だと感じた。

　私の噂だけならまだしも、オカルトめいた話が合わさっているとなれば、間違いない。

「あいつめ……」

「うふふ……怒ってるＢビー子コちゃんもかわいいです」

「……私、放課後は真っ先に旧校舎に向かうから」

「了解です」

　昼休みが終わりを告げる頃、再び空は崩れ始め、雨がノイズのよ

うに学校を包んだ。

　　　　＊

　――そして放課後、私はＤデイー音ネと合流すると、すぐに旧校舎へと向かった。

　旧校舎の二階にあがり、元音楽室のドアを開けると、そこにはすでに先客がいた。

「おや？　今日はずいぶんとお怒りだね？」

　いつも通りのへらへらとした笑い顔。

　彼はＡエー弥ヤの幼おさな馴な染じみのＣシー太タだ。

「……あんたの幼馴染はどうにかならないの？」

　私とＤ音は自分の荷物を置きつつ、なんとなくいつもこのあたりという席に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

「……あんたねえ……」

　私がＣ太に詰め寄ろうとしたところで、再び教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａ弥だ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　怒りを必死に抑えながらも、Ａ弥に睨にらみ寄っていく。

「ほうら、火の無いところには煙けむりが立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ａ弥の胸倉を掴つかもうとしたところで、Ｄ音の素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　Ｄデイー音ネは屈くつ託たくの無い笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　私はすっかり毒気が抜かれてしまって、先程まで座っていた自分の席へと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢビー子コはＤ音に弱いね」

「うっさい」

　……とにかくそんな感じで、今日も私達たちは目的も意欲もなく、旧校舎へと集まっていた。

　しかし最近はちょっとした発見があり、私達の活動はにわかに活発になって来ていた。

　──その発見というのが、『十年前の日記』だ。

十年前、この旧校舎で同じように「オカルト話」を集めていた生徒達による、交換日記。

　彼らが集めた話は、これまでに聞いたことのないものも多く、それが私達をとても興奮させた。

　そしてその中で、『終焉オワリノ本』と『終シユウ焉エンノ栞シオリ』という、今でもこの学校に伝わる伝説について触れられていた。

　彼らはこれらを手に入れ、そして……━死んだ。

「……これは、『終焉ノ栞』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

　最近身の回りで怪かい奇き現象が起こると告げるＡエー弥ヤが、突とつ如じよとしてその言葉を口にした。

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

「失敗って……」

「『終焉ノ本』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が静せい寂じやくに包まれる。

　私は……いや、ここに居る誰もが、彼の次の言葉を予想し、期待していたと思う。

「……もう一度やろうよ」

＊

こうして、私達は日記に書いてある通り『終焉ノ栞』を手にするため「こっくりさん」を始めた。方法としては一般的に知られているものと、そう変わらないと思う。ただ、今回は日記の通り、日記を再現するように注意して行おこなった。

「これから、みんなにひとつずつ質問をしていく。まずは誰か、僕に質問して？」

「……じゃあ、Ａエー弥ヤの昨日の晩ばん御ご飯はんは肉である？」

「……なにそれ？」

　私の質問に、Ａ弥は呆あきれたような顔をしている。

「……だって、突然質問って言われたって」

「あ、動き出した」

「…………「はい」だって……何食べたの？」

「ハンバーグだけど……」

「じゃあ合ってるね……こっくりさんこっくりさん鳥とり居いの位置までお戻りください」

　私は今、歯の奥がうまくかみ合わない感覚に襲われていた。

　それでいて、心臓の鼓動は今までにない歓喜を伝える。

　目は見開いて、瞬まばたきも忘れて十円玉の動きを追っていた。

「次はじゃあ、Ｂビー子コね……Ｂ子に好きな人は居ますか？」

　Ａ弥が突然、意味のわからない質問を投げかけてくる。

「ちょっ！　ちょっとなに聞いてるのよ！」

「ほらほらＢ子ちゃん、落ち着かないとダメだよ？」

「……あ、あ……もう……」

　十円玉は私の意志には関係なく、まっすぐに動いて行く。

「「はい」だって……ふーん……」

「ちょっとＡ弥！　聞いといてなんでそんな反応なのよ！」

「よく考えたらそんなに興味無かったから……あ、こっくりさん
こっくりさん、鳥居の位置までお戻りください」

　どうせこの情報も噂うわさ話ばなしのネタのひとつ位に思ってい
るのだろう。

　まったくもって失礼なヤツ……。

「……!!　つ、次はＤデイー音ネ行くわよ！」

「いいですよ？」

「Ｄ音には好きな人が居ますか!?」

　私はＤ音も同じ目に合わせようと思い、そう質問した。

「そんなつまらない質問でいいんですか？」

　十円玉はまたしてもまっすぐに「はい」に向かって動いて行く。

「へー、Ｄ音ちゃんにも好きな人が居るんだね」

「え？　私、Ｂビー子コちゃんのことが大好きですから」

　そう言って、にっこりと笑い、こちらを見つめる。

　……ダメだ、Ｄデイー音ネはこれくらいじゃ動じないんだった。

＊

──今考えると、私達たちは大きな思い違いをしていたのかもしれない。

私は気が動転してしまって、断片的にしか思い出せない。

突とつ如じよ激しいノイズ。

テレビから聴こえる放送。

脊せき髄ずいをアイスキャンディーに替えられたのではないかという程に背筋を冷気が通り過ぎる。

口は甘すぎるものと辛すぎるものとしょっぱすぎるものを同時に詰め込まれたよう。

耳は突然の爆音で狂ってしまったのだろうか、煩うるさすぎて静かなのか、静かすぎて煩いのか、それすらも判別することが出来なくなっていた。それなのに、なぜかアナウンサーの機械的な声だけは、はっきりと判別することが出来る。

『──ひとりの裏切り者「キツネ」によってゲームは始まった』

そう、私達は最悪のゲームに巻き込まれることになる……。

しかし、その時はまだ、本当の恐怖のただの１％も理解していなかった。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……わからない」

「……「キツネ」？　裏切り者だって……？」

「……た、質の悪い冗じよう談だんでしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、私達は学校を後にした。

　私は気が付くと自分の部屋にいた。

　正直、ここまでどのように帰ってきたのかも、記憶が定さだかではなかった。

　あれは夢だ。冗じよう談だんだ。嘘うそだ。まやかしだ。迷信だ。

　呪文のようになんども呟つぶやいた。

　寝て起きれば、また、いつも通りの、何の問題も無い日常がやってくるはず。

　そう祈りながら、布団ふとんの中で、ガタガタと震えて朝を待った……。

　しかし、結果から言うと私の祈りは叶かなうことは無かった。

　──次の日、学校の同級生が上半身と下半身とをバラバラにされ、死んだ。

　──昼休みに死体が発見されると、学校はすぐに不思議な空気に包

まれた。

　警察が現場検証を行う間、生徒達たちはみな教室に待機させせられていたのだが、どこかテレビの中の出来事のように現実感の無いクラスメイトは、昨日までの私達のようにどこか浮かれた雰ふん囲い気きを醸かもし出していた。

　私はその雰囲気の中で一人、ただ机の木目だけを見つめて思考を巡めぐらす。

　間違いない。間違いない。間違いない。

　これは『終シユウ焉エンノ栞シオリ』の仕業だ。

　私達以外が死んだということは、誰かがきっと手紙を受け取って、それを見たんだ。

　でもそれってつまり、私達も確実に殺されるってことだ。

　同じように？　それよりもっと残ざん忍にんに!?

　いやだいやだこわいこわいこわい……!!

　そして一いつ旦たん、事じ情じよう聴ちよう取しゆの対象となった一部の生徒をのぞいて、全校生徒に帰宅が命じられたが、私は昨日と同じように、旧校舎へと足を向けた。

　いつもの教室には、すでに昨日と同じメンツが集まっていた。

「──ねえ、誰が教えたの？　──誰が裏切り者なのよ！」

　私は自身の少し大きめな声に驚いてしまう。

　しかし、騒いだところでどうしようもないということは理解していた。

……結局のところ私達は、現状何もすることが出来ないということを再認識し、今日のところは一旦早めに帰宅するという結論に至いたった。

　どうしても心が落ち着かない私は、Ｄデイー音ネと共に学区から少し外れたところにある、小さな市立図書館へと向かうことにした……。

*

「……Ｂビー子コちゃん……」

　心配そうにＤ音が覗のぞきこんでくる。少し小さめな図書館なうえに、今日は平日のお昼過ぎということで私達たちの他には利用者は居なかった。

　職員はカウンターに一人居るだけで、本棚の一番奥のこのテーブルに座った私達は、二人きりと言っていい状態だった。

「……大丈夫？」

　Ｄ音が私の手ての甲こうの上に掌てのひらを重ねて再度尋ねてくる。

　私はその手をゆっくりと離してから「ありがとう」と小声で呟つぶやいた。

「……」

　それでもＤ音は心配そうに私を見つめている。

「……ごめんね。気が動転しちゃった……」

「……ううん」

「なんだろう……夢じゃないんだもんね……夢ならいいのにって、なんか、今でも信じられないっていうかさ……」

「……うん」

「わ、私は、ちょっと好奇心っていうか……でも、ほら、実際には『本』も『栞しおり』も手に入ったわけじゃないし……」

「うん」

「……十年前と同じには……ならないって……信じてるっていうかさ……」

「…………」

「…………」

「……Ｂ子ちゃ──」

「あははごめん！　私みたいな嘘うそつきがさ……嘘の塊かたまりみたいな私が何言ったって無む駄だだろうけどさ……私は、裏切ってないし、裏切りもしない──」

「Ｂ子ちゃん！」

「……っ！」

　ずっと下を向いたままだった私は、顔を上げて改めてＤ音の顔を見た。

　その顔は、とても優しく、包み込むような穏やかな表情だった。

　そして、再度私の手を握る。今度は、先程よりもしっかりと。

「──私がＢビー子コちゃんを守るから。だから……安心して？」

　──守る。よく意味が分からない言葉で、根拠も何も無い約束。

　考えてみればＤデイー音ネだってきっと同じような心情だろう。それなのに、取り乱している私のことを少しでも元気づけようとして、そんなことを言ってくれているのだ。

　私は少しだけ、ほんの少しだけ冷静になれた気がする。

「……ありがとう」

「ううん、私、Ｂ子ちゃんのこと、大好きですから」

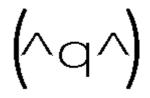
そう言っていつもと変わらない笑顔を私に向ける。

「……そうね、ありがとう。私も好きだよ」

　突然、Ｄ音はガタリと立ちあがると私の顔に自分の顔を近づけて来た。そして――

「……嘘うそじゃないですからね？　……あれ」

　――私の唇くちびるを奪った。

　Ｄ音のいつものシャンプーの香りが鼻び腔こうをくすぐる、ああこれは、確か金きん木もく犀せいの香りだと、そう、思った……。

ニセモノ注意報III　□今日はニセモノが出ます　　　　　　　　　　□

　自分の部屋に帰って来た。

　いつものベッドに身体を投げ出すと、天てん井じようを見つめながらぼんやりと今日起こったことを思い出してみる。なんだか今日一日で、一生分の驚きを全て使ってしまったのではないかという程に、いろいろなことがあった。

　今は妙に心は落ち着いている。

　いや、理解出来ないことが多すぎて、脳が思考することをやめてしまったのかもしれない。

「…………」

　軽く唇くちびるを指で触れてみる。

　敵をつくらないように浅く広く人間関係を構築してきた私は、当然特定の誰かと恋人関係になるということもしてこなかった。

　なので、自慢ではないが……ファーストキスというやつである。

　それを友達の女の子に奪われてしまった。

　嫌とかではないが、じゃあ嬉うれしいか？　と聞かれれば何と答えてよいか分からない。

とにかくＤデイー音ネは私にキスをした後、「今日はもう帰りますね」と言って先に図書館を後にした。私はそこで数分間茫ぼう然ぜんとした後、暗くなってから帰るのも怖いと思い、すぐに家路へとついた。

「ああもう！　わけがわかんない～！」

　顔を赤らめたり、突然の恐怖心を思い出したり、忙せわしなく感情を揺り動かしていると、次第に考えるのが面倒になってしまった。

　とにかくまずは着替えて、お風呂に入ってスッキリしよう！

　そう思い服を脱ぎ始めた。ブレザーを脱ぐと、私は微かに残るＤ音の残り香に気が付き、消臭剤を数回振りかけた。たとえ誰であろうとも、臭いがつくのは気に入らない。

　そしてクローゼットの近く、姿見の前に立って初めて自分のお気に入りのリボンが無くなっている事に気付いた。

　……あれ？　どこかで落としたかな……？

いくつか同じリボンを持っているので、それ程必死にではないのだが、鞄かばんの中を軽く探ってみる。すると、ちょうどそのタイミングで、携けい帯たい電話が震えた。

《Ｂビー子コ～今日なんかすごかったね～》

　クラスの仲の良い子からの携けい帯たいチャットだ。

　私はベッドに腰掛けて、携帯に文字を入力していく。

《うん、そうだねー》

《Ｂ子もすごいショック受けてそうだったから、大丈夫かな～って》

《うーん、やっぱりびっくりしたけど、今は少し落ち着いた》

《そっか～よかった》

《ごめんね心配かけて》

《ううん全然～帰宅してよしってなってからもすぐにどっか行っちゃったし》

《ちょっと気になることがあったからさー》

《そうなんだ、まああんまり今は一人にならない方がいいよね怖いし》

《うん》

《Ｂ子目立つしさ》

《えーそんなことないよ》

《そんなことあるって～》

　私は、書きかけの他た愛あいの無い言葉を打ち終えることも出来ず、クラスメイトの次の言葉に目を疑うたがった。

《──さっきも、駅で何してたの？》

《？》

《十分位前さ、駅前にいたでしょ？》

　駅は私の家とはまったく別の方向だ、さらに、十分前には私はもうこの部屋にいたことは間違いない。

《人違いじゃない？》

《え～Ｂ子だと思ったんだけど、違った？　リボンも着けてたしさ》

《うん、家にいたよ？》

《じゃあ見間違いかなぁ、あんなことがあった後だから、ちょっと心配だったんだ》

《うん、大丈夫。たぶん同じ学校の子だと思うよ》

《そっか～まあじゃあまたチャットするね》

《うんー》

　……どういうこと？

　例のＡエー弥ヤが流した噂だろうか？

　しかし、今日の、このような状況で、わざわざ私に確認してくるものだろうか？

　彼女の性格からしても悪戯いたずらということはないと思う。

　とすると、彼女もＡ弥の噂を事前に聞いていたため、たまたま似たような背格好の生徒を見つけて確認しただけだろうか……？

　でも、「リボンを着けていた」という言葉が気になる……。

　私の今日着けていたリボンは一体どこに行ったのだろう？

　私は改めて鞄かばんを手に取ると、くまなくその中を探してみることにした。

　せめてリボンが見つかれば少しは安心出来るかと思ったのだ。

　しかし、それはかえって私を混乱へと導くことになる。

「……？」

鞄の内側にあるポケットの中。基本的にそこを使うことがないので、あまり注意して見たことはないが、おそらくそこには、少なくとも今日まで何も入っていなかったはず……。

　──そこに、一通の手紙があった。

　直感で理解する。

　これは……『あの手紙』だ。

　終シユウ焉エンゲームの始まりと共に告げられた、決して届いてはいけない『手紙』。

　ゲームの本格的な始まりにして、終わりの宣せん告こく。

　……ここに、私がするべきことが書いてある。

　これを実行出来なければ、私は死ぬ。

『上半身と下半身が切断され、苦しそうな表情を浮かべて死んでたって……』

　お昼休み以降に流れたそんな噂が頭の中でエコーする。

　下半身を失い、それを探して彷徨さまよう上半身なんて、まるで都市伝説のような凄せい惨さんな殺され方だ……。嫌だ。怖い。怖い。怖い。やめて。悪い夢なら、もう覚めて……!!

　──カタッ。

　物音がした気がして、驚いてそちらに顔を向ける。

「──ひっ……!!」

　──私の勉強机の上には、見覚えの無い『本』と、それに挟まる『栞しおり』が見えた。

「いやあああああああああああああああああああああ!!」

　まるで駄だ々だをこねる子供のような絶叫。

　……そして、絶望。

　私は部屋の隅へと後ずさると、髪をつかみ、頭を抱え、ただただその場にうずくまった。

　それから数時間が経たち、家族が帰ってきた。

　ニュースで見たり、知り合いからいろいろな事情を聞いていた家族は、私のことを心配して、優しく接しようとしてくれた。

　しかし私は、ただ一言「しばらく放っておいて」とだけ告げて、部屋へとこもった。

*

　学校は一週間の休校になったそうだ。

　私は家族との接触をなるだけ避さけ、何もせずに部屋の中でただ膝ひざを抱えて一日目と二日目を過ごした。

　三日目に私は決心をし、手紙と本と栞を捨てた。夕方家を抜け出し、近くの公園の茂しげみの中へと投げ捨ててしまった。公園は花の香りが強く、私は気分が悪くなった。家に帰るとこの後すぐに何か起こるのではと気が気でなかったが、何事もなく、朝が来た。

四日目にもなると、クラスメイト達たちはすでに他人事のように、遊びに出かけていたようだった。私のところにも誘いの連絡が来ていたが、私はその連絡に「ごめん」とだけ返信した。

　そして、五日目。

　外に遊びに行っているクラスメイト達からは今日も何通も誘いのメールが届いていた。

　中には本当に心配してくれている友人も居るのだろうが、私にはどいつもこいつも薄はく情じような人間に思えてならなかった。

　人間と浅く広く付き合うことだけを気にしてきた私が言うのもおかしいのだが、人が死んだというのに、なぜこんなにも気楽に物事を考えられるのだろう？　私もアチラ側であれば、そのように気楽に振るまえたのだろうか？

「すごいことがあったね、大丈夫？」

　なんてメールを送ったりしているのだろうか？

　自問自答するまでもない。私は当然のようにそういうメールを送り、せっかくの機会だから遊びに行って、気持ちを切り替えよう？　なんて言ってるんだろうな。つまり私はそういう人間だ。薄はく情じような人間なのだ。

　そんなことを考えていると、またしてもクラスメイトの一人からのメールが届いた。

　今日何通目だと思いながら携けい帯たいを手に取ったが、その手はすぐに動きを止めた。

『結局遊びに来てるんじゃん～』

　……私はまたしても目を疑うたがった。

嫌な汗が首筋を流れて行く。

『どういうこと？』

『え？　さっきモールに居たでしょ？』

『居ないよ？　なんでそんな嘘うそつくの？』

『嘘じゃないって！　間違いないよ、たしかにＢビー子コだったって！　ちょっとやめてよ……』

　…………。

『Ｂ子？　ねえ？　どうしたの？　ちょっとなんかおかしいよ？』

　………………………。

『□□Ｂ子？』

　私はその子からのメールに返信するのをやめた。

　そして、六日目。

　今日は朝から雨が降っていた。暗い部屋の中、何日もの間不ふ規き則そくな生活を送っていると、時間間かん隔かくが狂ってしまう。

　今日は一体何時なのだろう？

　おそらくもう、一日が過ぎ、カウントダウンするかのように新しい朝を迎えるころだと思う。

　結局今日も、私を見かけたというメールが何通も届いていた。

　私のニセモノが、街を出歩いている……？

　これも『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなの？

一体なんなのよ……？　何だっていうのよおおおおおお!!

　──ピピピピピピピピピ！

「……っ！」

　突とつ如じよ鳴り響く電子音。それは携けい帯たい電話のコール音だった。

　電話をしてきた相手は……意外なことにＣシー太タだった。

　しかし、確かに電話番号は交換したが、Ｃ太から電話がかかってくることなんてなかったので私は少し動揺してしまう。

「……も、もしもし？」

「……………………………………………………………Ａエー弥ヤが殺された」

　──ブチッ。ツー……ツー……。

　たった一言。

　Ｃ太の声だったかもわからない程の小声でそう告げられた。

「……え？」

　私はすでに相手の居ない電話を持ったまま、そう答えた。

　……どういうこと？

Ａ弥が……殺された……？

死んだではなく、殺された……？

私は茫ぼう然ぜんと虚こ空くうを見つめながら瞬まばたきを止めた。

部屋は静せい寂じやくに包まれている。

そして、またしても静寂を切り割くように突然のノイズが響いた。

テレビがリモコンも触っていないのにノイズを映し出す。

……これは、あの日と同じ……！

『……おはようございます。今日の天気予報です』

無機質なアナウンサーの声が狭い部屋に響き渡る。

淡々としゃべる声がひどく陰いん惨さんに聞こえた。

『今日は、一部地域でニセモノ注意報が発令されております……お気をつけください』

……ニセモノ？　それって──

──ピンポーン。

「……ッ!!」

　突然鳴り響くチャイムの音に身体を強こわ張ばらせる。

　―ピンポーン。

　家族は今日は居ないのだろうか……？

　再度チャイムが鳴らされる。

　私は恐る恐る玄関へと近づいて行く。

　テレビのノイズをこれ以上近くで聞いていたくなかったことと、宅急便か何かであっても、誰かと会話をすることで安心したかった。

　―ピンポーン。

　私は玄関のドアに近づくと、ゆっくりとゆっくりと覗のぞき穴に目を近づけた。

　……私の瞳が反射してしまっているのだろうか？　なぜか外の様子をうかがい知ることは出来なかった。

　外からは季節外れの花の香りが漂ってくる。

「……？」

　―ガチャ！

――ピンポンピンポン。

ガチャ!!　ガチャガチャガチャ!!

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン…………。

…………ガチャ!!

「……ひっ!!」

　ドアノブが壊れるのではないかという程に激しく動かされる。

　私は思わず声を上げて尻もちをついてしまった。

　ガチャ……。

　私の声を聞いてドアノブの動きが止まった。

「……………なんで出ないの？」

　私は無む理り矢や理りに身体を起こして駆け出していた。

　部屋へと戻ると、ベッドの上で丸くなり、布団ふとんをかぶって耳をふさぐ。

　テレビのノイズは相変わらず流れたままだったが、遠くで激しいノックの音とドアノブを開けようとする音、そしてチャイムの音と混ざってしまって、アナウンサーの声が流れていたかどうかは、よくわからなかった。

「助けて助けてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけて!!」

　祈るように私は呟つぶやく。

　もう何も聞きたくない、もう何も見たくないー！

「なんで出てこないの？　ねえ？　なんで？　ねえ！　ねえええええええ!!」

　遠くで何やらものすごい音が聞こえ、私はさらに身体を強こわ張ばらせる。

「やだやだやだやだ!!　やだやめてよやめてよ!!　助けてよ助けてよ!!」

　こんな状況で不思議なことに、私の脳内にはアイツの顔が浮かんでいた。

　……あの、卑ひ屈くつで厭いや味みなあの笑顔が……。

「たすけてよぉ…………………………………………Ａエー弥ヤぁ……」

　部屋の中に入ってくる気配。

　テレビを叩たたき落おとす音。

　そして、訪れた静せい寂じゃく。

　――がっ！

　布団ふとんを剥はいで私の顔を至近距離から覗のぞきこんだのは、あの瞳。

　目が合うのは、これが二度目になる。

　少しだけ私から離れると、嬉うれしそうな笑顔を浮かべるその人

物の全体像が見えてきた。

　あまりにも見慣れたその外見に、驚くことさえ出来ない。

　―まぎれもなく、そこにいたのは……。

「……私があなたを守ってあげる」

　とてもとても優しい口調でそう言うと、

　手にしたハサミを大きく上に掲かかげた。

　ああ、そうか。

　……犯人は……。

　　　＊

『××××××××××××』

　―床に転がったテレビが部屋の壁を奇妙な模様のように照らして

いる。

　テレビからは、大きなノイズ混じりにアナウンサーの声が流れている。

『天気予報です。今日は全国的に、ニセモノ注意報が出ています。お気をつけください。そして、これまでの犠ぎ牲せい者しやをお伝えします。犠牲者は、ひとりでかくれんぼを行った人。そして、お願いを無視した人です。明日の犠牲者は…………』

ニセモノ注意報IV　□それじゃまたね-

　──私は完かん璧ぺきだ。

「Ｂビー子コちゃんって、カワイイよね！」

「ね～アイドルみたいにスタイルもいいし」

「それに頭もいいし、性格もいいし……ホント憧あこがれちゃうなあ～」

「えー……そんなことないって……」

「そんなことあるよ！」

「運動神経だっていいしさ！　部活入ってないのもったいないよ～」

「うーん……部活やってる人に比べたら全然だよ」

「そんなことないって。それに、男子にもすっごい人気だし」

「ねー！　でもＢ子だったらわかる～」

「私が男子でも告白するもん」

「あはは」

「で、で、誰か好きな人とか、付き合いたい人とか居ないの？」

「う～ん……そういうのよくわかんないからな……」

「えーつまんなーい」

「でもまあ、正直Ｂ子レベルの女の子と付き合える男子なんてそうそう居ないかもね」

「言えてる」

「とにかく、誰か好きな人とか出来たら教えてよね！　絶対！」

「うん。大丈夫だよ」

「約束だよ～！」

「絶対ね！」

「あ、やばい、もう授業始まるよ」

　──そう、私は完かん璧ぺきだ。

　完璧な……『ニセモノ』だ。

　クラスメイトの一人が私に小走りで近づいてくる。

「……あ、ねえねえＢビー子コ」

「なあに？　まだなにかあった？」

「……う～ん、たいしたことじゃないんだけど……」

「……ん？」

「あ、うん……あのね……」

「？」

『…………Ｂ子、もしかしてシャンプー変えた？』

CHAPTER3
Re:不在着信

CHAPTER3

Re：不在着信I

「本当にしょうがないなあ、Ａエー弥ヤは」

　──小さい頃の記憶。

　オレは近所に住むＡ弥といつも一緒にいた。

　一緒にいたといっても、家族ぐるみの付き合いで、仕方なく遊んでいただけ。

　いつも何を考えているんだかよくわからない彼のことを、オレはなんだか苦手だった。

　彼は小さい頃から人付き合いが得意ではなかったと思う。

　いや、オレから見るとそういう風に見えただけかもしれない。

「もっとこういう風に言えばいいのに」

「ちゃんと笑顔で対応した方がいいのに」

　子供の頃から大人に気に入られ敵を作らないことがうまかったオレは、次第にＡ弥の言動が気になって仕方なくなってしまっていた。

　そして最初は本当にちょっとした気まぐれで、Ａ弥の言動に対してフォローをするようになった。

「Ａ弥は不ぶ器き用ようだけど、とっても喜んでましたよ！」

「Ａ弥は恥ずかしがってるだけだから」

　途と端たんに彼の周りから敵が居なくなるのを感じて、小さかったオレは、勝手にちょっとしたヒーロー気分になっていた。

「本当にしょうがないなあ、Ａ弥は」

　Ａ弥はオレが居ないとダメなんだ。

　幼おさな馴な染じみのＡ弥のことを影から救ってあげているのはオレなんだ。

　不思議な充足感を感じていた。

　誰かに必要とされていると感じることが、これ程気持ちがいいことだと思わなかった。

　直接Ａ弥から感謝されたことはなかったが、その時の自分はそれすらもＡ弥の悪いところで、それゆえに自分が必要なのだと信じて疑うたがわなかった。

　しょうがないＡエー弥ヤと、ヒーローの自分。

　いつしか、口くち癖ぐせのようにＡ弥を蔑さげすみつつ、自分は満面の笑みで彼の隣にいた。

　自分の意のままだ、この世界をわたっていくことがこんなに簡単だなんて。

　まったくもってちょろい。思わず笑みがこぼれる。

　──しかし、完全無欠のヒーローではない自分はある時、あるミスを犯した。

小学校六年生の頃、数人の友達が家へ泊りにやってきた。

　当然Ａ弥もお泊まり会には参加していた。

　いつものようにＡ弥もうまく会話に参加させながら、ゲームなどで楽しみ、何の問題もなくお泊まり会は終了すると思われた。

　しかし、クラスでもかなりガキ大将的なポジションに居る一人の生徒が、オレの部屋からひとつのぬいぐるみを発見する。

　まるで女の子が持つようなうさぎのぬいぐるみ。

　使い古されたそれは、かなり小さい頃に買ってもらったものだった。

　実は今でもベッドの横に置いている。

　さらに正直に言うと、その年になっても時折話し掛け、抱いて寝ることも少なくなかった。

　瞬間的に「しまった！」と思った。

　そのクラスメイトはオレから見るとまだかなりガキで、悪い予感しかしなかった。

　そして悪い予感は見事に的中し、これ見よがしに騒ぎ立てる。

「うわ！　Ｃシー太タ！　こんな女みたいなもん持ってんのかよ！　姉ちゃんも妹も居ないから、これ絶対お前のだろ!?」

　オレは冷や汗を流し、なんとか誤ご魔ま化かすための言葉を探していた。

　たったこれだけのことでも、次の日からオレは学校でいらぬ噂を立てられることが理解出来た。それだけは、それだけは避さけねばならない。

不覚！　不覚!!　一生の不覚!!

「……そのぬいぐるみ、僕のだから……」

　突とつ如じょ聴こえたその言葉に耳を疑うたがった。

　オレは声のする方を振り向くと、そこにはいつもと変わらぬ無表情のＡ弥がいた。

「ぬいぐるみ……僕のだから……返して」

「……Ａエー弥ヤ？」

「なんでお前のぬいぐるみがＣシー太タの家にあんの？」

「僕ん家すぐそこだから……ちょっと前に泊まった時、忘れてった……」

「……ふーん」

　クラスメイトは興味を無くしたようにＡ弥にぬいぐるみを渡した。

　オレは胸を撫なで下おろすと同時に、複雑な感情に襲われていた。

　□□Ａ弥は一体何を考えている!?

　もしかしたら普段からＡ弥はオレに対して復ふく讐しゅうの機会を狙っていたのかもしれない。

　それはまずい。とてもまずい！

オレは今まで、Ａ弥を救うことで、自分の価値を見み出いだしてきたのだ。

　ここで立場が逆転してしまうことは非常にまずい！

　その日はＡ弥が次の日何と言ってくるかが気になって、眠れなかった。

　そして次の日、クラスメイト達たちが帰った後に、オレはＡ弥と二人で自分の部屋にいた。

「…………」

　オレはなかなか話を切り出すことが出来なかった。

　考えてみればＡ弥がいつも何を思っているのか、考えたことすらなかったのだ。

　一体何を思っている？

　何を思ってオレをかばった!?

「……あのさ……」

「……！」

　口火を切ったのはＡ弥だった。

　そしてその内容は思いもよらないものだった。

「……いつも、ありがとう」

「……!!」

　突然のことでおそらく変な顔をしていたと思う。

顔の上半分は驚きに、下半分は喜びに歪ゆがみ、次第に全て喜びへと変換されていった。

　Ａエー弥ヤはやはり感謝していたんだ！

　オレの！　日頃の行動に！

　あまりにも表情に出ないので、気が付いていないと思った時もあった。

　むしろ！　迷惑に感じているのではと怯おびえた時もあった！

　──だけど違った！

　Ａ弥はオレに感謝し！　必要とし！　その感謝の証として、オレをかばったんだ！

　……いや違う。

　昨晩のあの行動は、オレのためじゃない！

　むしろ、Ａ弥自身のためでもあるんだ。

　オレがクラスでの立場が危うくなると、誰がＡ弥のことをうまく助けてやれる？

　そうとも！

　Ａ弥には、オレが必要なんだ！

　これからも、オレがＡ弥のことを助けないといけないんだ！

「…………しょうがないなあ、Ａ弥は」

　顔から笑みが取れない。冷静な感情ではいられない。

「……うん、いつもごめんね」

「いいんだよ！　気にするなよ！」

「うん。あ、そういえば……これ」

　そういって昨日の夜のぬいぐるみをオレに差し出してくるＡ弥。

「…………あげるよ」

「……え？」

「そのぬいぐるみ……あげるよ……Ａ弥に」

「……」

「もらってやってくれよ！　ね！」

「…………わかった」

　そういって無表情のままぬいぐるみを抱きしめるＡ弥。

　その姿が妙に似合っているなあと、オレは思ったのだった。

　そしてその日から、オレはより一層Ａ弥に敵が出来ないように、そして人間関係でトラブルにならないようにと暗あん躍やくすることになった。

―時は流れ、二人は高校生になった。

Ａエー弥ヤは中学生の頃から都市伝説や怪談話といったオカルトの類たぐいにはまっていき、さらに根暗な性格になった。

オレはというと、人付き合いの良さを活いかしつつも、目立ちすぎることもなく、敵も作らず、うまくクラスの中でも中間的なポジションを保ち続けていた。

オレに言わせれば、なんでも完かん璧ぺきに出来すぎてしまうというのは、逆に敵を作るものだ。

クラスで一番目立つような存在になることも出来るだろうが、それを行うことはしなかった。

かといってある程度以下に劣等的な立場になれば、たちまちクラスの上位の連中から見下した目で見られることになる。

世の中を渡っていくということは、バランス感覚に他ならない。

そのことに何よりも気をつけているオレは、Ａ弥の言動にも注意をしつつ、なるべくある程度のバランスにそれとなく導いていた。

Ａ弥には、オレ以外に特別仲のいい友人も居なかったが、オレが居ることで孤立することもなかった。

週に一度から二度、旧校舎に寄ってＡ弥の都市伝説についての話を聞きながら、彼の素そ行こうについてそれとなく調査をする。

そんな日々を続けながら、Ａ弥を緩ゆるやかに見守って来ていた。

―しかし、ある時変化が起こった。

Ａ弥が、学校でも一番美人といわれて有名な女子・Ｂビー子コを、あろうことかオレ達たちの旧校舎の教室へと連れて来たのだ。

「……はじめまして」

「……やあ、Ｂ子ちゃん、はじめまして」

「はぁ……やっぱりあんたも私の名前知ってるのね？」

「ははっ、誰でも知ってると思うよ？　あ、オレの名前はＣシー太タ。Ａ弥の幼おさな馴な染じみ、かな」

「……ふーん？　そう……」

一体何があった⁉

こんな目立つ女を横に連れていては、変な噂が立たない訳がない。

Ａエー弥ヤが目立ち過ぎないようにと仕込んできたというのに、一体どこでこんなやつと接触したんだ⁉　早くこいつをＡ弥から離れさせなくては……!!

しかし、そんな思おも惑わくとは裏腹に、さらに他のメンバーが旧校舎の集会に加わり、オレ達たちは明確な目的を持っているわけではないのに同好会のような活動を始めることとなる。

オレは最初ビクついていたが、これはこれでＡ弥を保護するのに上手く利用出来ると思い直すことで、なんとか平静を保っていた。

―そして、一ヶ月程が過ぎた。

*

ある日、放課後の旧校舎にて。

「……お」

「……あら」

　先に来ていたのはＤデイー音ネだった。

　基本的に女子と話すのは苦手だが、Ｂビー子コよりはましか。

「やあ、Ｄ音ちゃん、今日は早いんだね？」

　オレはいつも通りの笑顔で話しかける。

「ええ、Ｃシー太タさんとお話したかったので」

　彼女はニッコリと笑ってこちらを向く。

　なんだって？　こいつ、なんて言った？

「……ごめん、Ｂ子と……じゃなくてかな？」

「あら？　Ｂ子ちゃんとはもちろんお話したいですが、Ｃ太さんともお話してみたいです」

「……そっか。何かな？」

　前から思っていたが、本当に何を考えてるかわからないやつだ。

　Ｄ音はＢ子が来るようになってすぐに旧校舎のメンバーになった。黒のロングヘアーが特とく徴ちよう的てきで、どちらかというと根暗な性格だと思う。クラスなどでは特に目立たなく、特別仲の良い友達なども居ない印象だ。

　しかし、この旧校舎の教室では人を少し茶ちや化かすような態度を取ることがある。

　本来はもしかしたらもっと悪戯いたずらが好きな性格なのかもしれない。

　彼女は悪戯っぽい笑顔のまま言った。

「……私、私とＣ太さんって似てると思ってるんです」

「ん？　どういうことかな？　どちらかというと僕は、Ａ弥とＤ音

ちゃんの方が似てると思うけど？」

「それは表面上でしょ？」

「……？」

　Ｄデイー音ネは顎を上げ、脚を組みかえながら続けた。

「……誰かに寄りかからないと生きていけない」

「……何言って……？」

「本当はわかってる。自分は空くう虚きよな存在だって。誰かの中に自分の存在意義を見み出いださなければ、生きていることも出来ない存在だって。自分は本当は無意味で、無力で……」

「Ｄ音ちゃん？　何を言って──！」

「まだ短い期間だけどね、あなたのこと見てると腹が立つの。まるで……私の鏡みたい。随ずい分ぶんと方向性は違うみたいだけど。あなただって気が付いているんでしょう？　もしも相手が自分のことを必要としなくなったら。いや、もしかしたらもう必要無いのかもしれない、ただ、それを確かめる程の勇気も無い。そして自分の──」

「──黙れ」

　オレは自分でもびっくりする程、低い声を出した。

「……うふふ冗じよう談だんです。私これでも、Ｃシー太タさんとは仲良くやって行きたいなって、そう思ってるんですよ？　あなたは別に目的ではないかもしれないですが、お互いにとってのメリットを、理解出来ないことはないでしょう？」

　……こいつ。

　オレが敵意をむき出しにした視線でしばらくＤ音のことを睨にらんでいると、背後から物音が聞こえて来た。

「……あれ？　Ｃ太」

「あ、Ｄ音。早いんだね？　何してるの？」

　そこにはＡエー弥ヤとＢビー子コの二人が居た。

「Ｂ子ちゃん！　うふふ、Ｃ太さんとちょっと世間話していただけですよ」

「そうなんだ？」

「ね？　Ｃ太さん」

　そういって笑顔でこちらを向くＤ音。

「……Ｃ太？」

「…………ああ、ちょっとした世間話をね」

　オレはそう答えると、いつも通りの笑みで振り返った。

＊

　さらに少し日が経たつ。

　オレはＡエー弥ヤと共に、今日も旧校舎へと向かっているところだった。

「……」

　あの日以来、表面上には出さないが、オレは苛いら立だちを募つのらせていた。

　Ｄデイー音ネはオレがＡ弥に依い存ぞんしていると思っている。違う！　それは違う！　Ａ弥がオレに依存しているんだ。だってそうだろう？　オレはＡ弥を助けているんだ。オレが助けなければＡ弥は今頃きっと……。きっと……なんだ？　オレが居なかったらＡ弥はどうなっている？　クラスでも孤立した？　それは今だって変わらないんじゃないか？　そもそも、Ａ弥はそういったことを気にするのか？　いや、違う。あの時だってオレにありがとうってそう言ったじゃないか！　Ａ弥はオレに感謝しているはずだ!!　そう

だ、そうに違いない。

「──……太？　Ｃシー太タ？」

「……っ！　ああごめん」

「……大丈夫？　体調でも悪かった？」

「いや、ちょっとボーっとしてただけだから、大丈夫だよ？」

「……そう？」

「ああ」

　Ａ弥がオレの顔を覗のぞき込こんでくる。

相変わらずの無表情だが、オレにはすぐにわかった。

　Ａエー弥ヤはまた、新しい噂うわさ話ばなしを手に入れたのだ、と。瞳の奥に渦うず巻まく興奮が溢あふれて来ている。

「……そういえば今日は、何かあった？」

　Ａ弥は少し口の端を上げて話し始めた。

「そうなんだよ……！　ねえ、Ｃ太、この旧校舎で起こった不可解な連続殺人事件は知ってるでしょう？　実はその重要な手掛かりになりそうな日記をね、昨日旧校舎で偶ぐう然ぜん見つけたんだよ！　まだ、中はちゃんと見ていないんだけど──……」

　ほらね。Ａ弥は昔からそうなんだ。何かを見つけるとまずオレに報告に来る。

　表情にはほとんど出ないけど、何か言いたそうな顔をしてるのが、オレにはわかる。

　オレはその話を聞いて相あい槌づちを打つ。

　そして「すごいね！　Ａ弥！」なんて言ってやるんだ。

　いつも無口な分、こういった話になるととても早口になり、少し声のボリュームが大きくなる。

　そんなＡ弥もいつも通りだ。

　何も変わらない。

　何も変わってないんだ。

「……へえ、それはすごいね！」

「でしょう？　Ｂビー子コにも話したんだけどね、すごい興味を示してたよ。それで、今日はこれからみんなでその日記を調査して──」

　──なんだって？

　……Ｂ子にも話した？

　これまで、どんな些さ細さいなことだって、まずオレに話をしてたのに？

　ちょっと待て。それじゃあ、Ａ弥が何か話しちゃいけないことを話してないか、チェック出来ないじゃないか。なんで、そんな勝手なことをしたんだ？　よりによって、なんでＢ子に？　いや、まだＢ子で良かったのか？　そもそもオレは何を気にしている？　これじゃあまるでＤデイー音ネが言っている通りじゃないか。オレが……Ａ弥に依い存ぞんしている？　まさか、そんなことない。そんなことない……！

　オレはそれからのことをあまりよく覚えていなかった。いや、実際には覚えているのだが、まるで自分のことではないかのように世界が客観的に見えた。表面上は平静を保ちながらも、心の中では何か別のことをずっと考えている。感情だけがすっぽりと抜け落ちた感じ。

　──それはまるで、小説を読んでいるかのようだった。

　感情の抜け落ちた記憶で思い出すと、それからオレとＡエー弥ヤ

は教室でみんなと合流し、日記を読み進めていった。内容は、これまでに聞いたことのないような噂うわさ話ばなしや、「終シユウ焉エンノ栞シオリ」に関することが書いてあり、Ａ弥のみならずみんなが興奮していた。

そして、あっという間に時間が過ぎて行った。

おそらくみんなと解散した後にＡ弥と一緒に帰ったはずなのだが、よく覚えていない。

気が付くと家の中に居た。

そして、オレは何な故ぜかあのぬいぐるみのことを思い出しながら、いつのまにか眠りについていた──。

それから約一週間後。

オレは今日もまた旧校舎の、この教室に来ていた。

携けい帯たい電話をいじりながらしばらくだまって考え事をしていると、扉とびらを開く音が聞こえる。

そこにはＢビー子コとＤデイー音ネが立っていた。

Ｂ子はオレを確認すると、キッとこちらを睨にらんだ。

「おや？　今日はずいぶんとお怒りだね？」

いつも通りのへらへらとした笑い顔でそう答える。

心の水面はいつもにも増して穏やかだ。

「……あんたの幼おさな馴な染じみはどうにかならないの？」

Ｂ子とＤ音は荷物を置きつつ、なんとなくいつもと変わらない席に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

「……あんたねえ……」

Ｂ子がこちらに詰め寄ろうとしたところで、再び教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａ弥だ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　Ｂ子がＡ弥を睨みながら近寄っていく。

「ほうら、火の無いところには煙けむりが立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ｂ子がＡ弥の胸倉を掴つかもうとしたところで、Ｄ音の素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　Ｄ音は飾り物のような笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　先日の件以来、こいつの挙動すべてに裏があるように思えてならなかった。

　そう考えると、Ｄ音という人間の腹黒さに思わず笑いが込み上げてくる。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤ音に弱いね」

「うっさい」

　オレはＢビー子コを茶ちや化かすようにして話を続ける。

「Ａエー弥ヤだって、何も無意味な嘘うそをついたわけじゃないじゃないか」

「そうですよ、私達たちの活動趣しゆ旨しに非常に合ってると思います」

「活動趣旨とか……そんな大たい層そうなもんじゃないでしょうが」

　──確かに、そんな大層なものではない。

　しかし、Ａ弥が発見した日記をきっかけに、オレ達の活動はにわかに活発になっていた。

　これまでは週に一度集まるか集まらないか程度だったのだが、最近はほぼ毎日のように誰かしらが旧校舎に集まっている。

　数日前も、実際に日記に書いてある方法で、こっくりさんを行おうと試みた。

　その時はオレとＡ弥とＢ子の三人しか居なかったので、「試しに」という感じだったのだが、いざ始めてみると脊せき髄ずいに冷たい棒を差し込まれたような感覚が襲い、恐怖のあまり途中でやめてしまった。

　今日は旧校舎のメンバーが全員集まっている。

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　Ａ弥が唐とう突とつに切り出す。

「気のせいなのか、もしくは何かの怪かい奇き現象なのかもしれないけど」

「……怪奇現象？」

　Ｂビー子コはガタリと椅い子すを立ちあがると、Ａエー弥ヤに向いて座り直した。

「そう……最近朝起きるとね、確実に誰かからの視線を感じるんだ」

「家族……とかではなくてですか？」

「うん、両親は早く出かけるからね」

「じゃあ誰かが外から見てる～とか？」

「そういうのじゃなくてもっとこう、背後からの視線を感じるんだよね……。振り向いてみても何も居ない、そういうことが頻ひん繁ぱんに起きてるんだ」

「……ふーん」

「〝座ざ敷しき童わらし〟とか、そういったものかな……」

「〝メリーさん〟だったら電話とかかかってくるんだよね？」

「最近のメリーさんはＳＮＳとかも使うらしいよ」

「うーん……」

　Ａ弥がひとつ呼吸を置いてから、さらに続けた。

「ひとつ、気になることがあるんだけど」

「なに？」

「この間、こっくりさんをやったじゃない？　僕とＢ子とＣシー太タの三人で……」

「ああ……」

「──翌日からなんだよね、視線を感じるようになったの……だからこれは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

　──視線を感じる……か。

　Ａ弥の家は確かに両親が早く仕事に行くので、Ａ弥が起きる頃には一人だ。

　しかしそれは──……

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

　Ａ弥が、突とつ如じよとしてその言葉を口にした。

「失敗って……」

「『終焉オワリノ本』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が静せい寂じやくに包まれる。

　オレは彼の次の言葉を予想し、Ａエー弥ヤらしいなと、ただそう思った。

「……もう一度やろうよ」

＊

こうして、オレ達たちは日記に書いてある通り『終シユウ焉エンノ栞シオリ』を手にするため「こっくりさん」を始めた。

「これから、みんなにひとつずつ質問をしていく。まずは誰か、僕に質問して？」

「……じゃあ、Ａ弥の昨日の晩ばん御ご飯はんは肉である？」

「……なにそれ？」

「……だって、突然質問って言われたって」

「あ、動き出した」

「…………「はい」だって……何食べたの？」

「ハンバーグだけど……」

「ハンバーグかー、Ａ弥の家のハンバーグ美お味いしいんだよね、また食べたいな」

　オレは小さい頃のことを思い出しながら、そう呟つぶやいた。

　そのようにしてこっくりさんは進行していき、いよいよ最終局面に近づこうとしていた。

　次はオレが質問に答える番。

「次は……Ｃシー太タね。うーんどんな質問がいいかな」

「あのさ、こういう質問はどうかな？」

　オレはＡ弥を見ながらこう言った。

「……オレの家に昔あったぬいぐるみは、ペンギンのぬいぐるみだ」

「え？」

「どういうこと？」

「……あ、動き出した」

　こっくりさんは「いいえ」へと動いて行った。

「Ｃ太、これってどういう……？」

「こっくりさんがちゃんと当たっているか、わからないじゃない？　だから、Ａ弥も知っている質問にしようと思ってね。……Ａ弥、オレの家にあったぬいぐるみは、何のぬいぐるみだったか……わかるよね？」

「…………」

　Ａエー弥ヤは少しだけ考えて、こう言った。

「……うさぎ」

　…………！

「……だったよね？」

　─…………だったよね？

　ちょっと待って、Ａ弥。Ａ弥にとっても大事なぬいぐるみだろう？

　それを、だったよね？　だって？

　Ａ弥はまさか、まさかだけど、オレが気が付かないうちに……。

　─ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「「「「「□□」」」」」」

　突とつ如じよ、旧校舎に設置されたままの古いブラウン管のテレ

ビがノイズを立てながら点灯した。

「何」

「きゃあああああ！」

「……まさか！」

「…………」

『──ひとりの裏切り者「キツネ」によってゲームは始まった』

　無機質な声が教室に響く。

　まるで脳に直接流し込まれるかのような不快なノイズ。

『抜け出したければ以下の条件に注意をし、終しゆう焉えんを迎えよ

　──さあ、楽しい終焉ゲームの始まり始まり』

・ゲームの終焉を迎えるには「キツネ」を殺せ。

・「キツネ」を見つけることが出来なければ、それ以外は死ぬ。

・「キツネ」を探しながら、こっくりさんのお願いに従え。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

・このゲームは終しゅう焉えんを迎えるまで絶対に抜け出すことは出来ない。

　淡々と語られる意味のわからない言葉がさらに頭をかき乱す。

　──殺せ？　コロセ？　死ぬ？　シヌ？

　ゲーム？　裏切り者？　キツネ？

　一体さっきから何を言っているんだ……？

　まったくもって質の悪い冗じよう談だんだと笑い飛ばしてやりたいのだが、絶対的な恐怖がオレに、みんなに、これが只ただ事ごとでないと告げていた。

「…………っ」

　──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

　ようやく声を絞しぼり出そうとしたところで、再び激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

　──そして訪れる静せい寂じやく。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……わからない」

「……「キツネ？」「裏切り者」だって……？」

「……た、質の悪い冗談でしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、オレ達たちは学校を後にした。

Re：不在着信III

　結局オレはＡエー弥ヤと一緒に帰ったが、一言も話すことは無かった。

　自分の家につき、部屋の中に入ると、すぐにＰＣの電源をオンにする。

　すぐにいつもの見慣れた画面が立ちあがった。

　──そこには、先程別れたばかりのＡ弥の姿が映っていた。

　最初は冗じよう談だん半分のつもりだった。

　Ａ弥のバッグのポケットの奥、さらにその裏側に、まったく気が付かれない程の小さい盗とう聴ちよう器きを仕掛けたことが始まりだった。

　人の生活を覗のぞき見みるという興味は、これはＡ弥のためだと押し通す事でさらにエスカレートしていった。

　もともと、家族ぐるみの付き合いがあるため、合あい鍵かぎの隠かくし場所も知っている。

　家の中で見つかったところで、怪しまれることもない。

　そうとも！　オレはＡ弥の唯ゆい一いつにして無二の親友なんだから！

　そういった気持ちでオレは盗聴器や盗とう撮さつ機きを仕込み、Ａ弥の行動を監かん視ししていた。

「視線を感じる……ね」

Ａ弥は部屋に戻るとベッドに横になり、胎たい児じのように膝ひざを抱え、震えながら布団ふとんに潜もぐり込んだ。しかし、なんども布団を出ては周りを確認したり、テレビをつけたり消したりの繰り返しをしていた。

　正直に言うと、オレも先程から震えが止まらない。

　Ａ弥のそんな動きを見ながら、独り言を呟つぶやくことで、なんとか平静を保とうとしていた。

「本当に……しょうがないなあ、Ａ弥は」

「Ａ弥がやりたいなんて言うからだろう」

「まさか、本当なわけがないさ……」

　そうだ、冷静に考えれば、本当にこんなことが起こるわけがない。

　死ぬだの殺すだの……。そんなことが出来るもんか。それにもし、万が一本当だとしてだ、終焉オワリノ本と終シユウ焉エンノ栞シオリが現れない限り問題はないはずだ！　そうだろう？　それに、裏切り者さえ見つけ出せば、オレ達たちが死ぬことなんてないはずだ……。

　ここでしっかりしなくては、Ａエー弥ヤのことを助けてやれるのは、オレだけなんだから。

　……とはいえ、さすがに精神的な疲労はピークを迎えようとしていた。

　オレはＰＣの電源を落とし、ベッドに入ろうと、椅い子すから立ち上がった。

──振り返ると──……

「うわああああああああああああああああ!!」

　ベッドの上には見覚えの無い物が。

　──栞しおりの挟まれた古そうな本。

　皮ひ膚ふ感覚がオレに告げている。

　──本物だ、と。

　どういうことだよ！　どういうことだよ!!

　よりによって、オレのところにまっさきに!?

　そんなことってあるもんか、そんなことって……！

　怖い！　怖い！　どうしよう！　どうしよう！　どうしたらいいんだ!?

　心臓の鼓動が早まる。

　ガクガク震える足を押さえつけ、ページがめくれないように本を掴つかんだ。

　まずは、これをどこかに処分しなきゃ……。

　とりあえずと自分のバッグの中にそれを仕し舞まい込こむと、先程のＡ弥と同じように布団ふとんを被り、膝ひざを抱えて震えながら目を閉じる。携けい帯たい電話に着信があった気がしたが、オレはそれを無視して眠りについた。

*

そして次の日、Ａ弥が家を出たのを確認してから、今日も学校へと向かった。

　この本と栞を一刻も早くどこかに捨ててしまいたい……。

　それに、本が届いたからといって本当に死ぬかどうかわからない。

　さすがに終焉オワリノ本について他のメンバーと話す程の勇気は無いが、反応をうかがうことくらいは出来るだろうと、そう思っていた。

　Ｃシー太タが校門をくぐり、靴くつ箱ばこの近くに近づくと、そこではＡ弥がクラスメイトから話かけられているところだった。

「おーっすＡエー弥ヤ！」

「……何？　今日は僕体調が……」

「──ん？　それなに？」

　Ａ弥の靴くつ箱ばこの中から手紙が落ちてきた。

　オレはすぐにそれが、「あの手紙」だということがわかった。

　……Ａ弥の所に手紙が届くだなんて……!?　どうすれば……！

　その手紙をクラスメイトは拾って言った。

「おおー！　もしかしてこれって、あれ!?　ラブレターとかそういうの!?」

「……あ、おい」

「な？　誰からなの？」

「やめろって……」

「いーじゃん、ね、俺にだけちょっと見せてよ、な？　な？」

　……待って、Ａ弥、まさか……まさかそんな。

　Ａ弥は確かに卑ひ屈くつな性格をしているが、実際は虫も殺せない程気弱で、優しくて、誰かを傷つけるくらいなら、自分が傷つく、そういう性格だ……。

　──だからまさか、そんなことは言わないよね？

「……しょうがないなぁ……誰にも内緒だよ？」

　□□Ａ弥ぁっ!!

　オレは思わず声が出そうになるのを抑えて靴箱の陰かげに身を潜ひそめた。

　……まさか、まさかそんな！

　見てしまった彼はどうなる？　アレが、アレがもし本当だとしたら──!!

「……
なんだよこれ？」

「──っ！」

　そのクラスメイトはＡ弥に手紙を渡すと、ブツブツと呟つぶやきながら、まるで生気が抜けたようにフラフラと渡り廊ろう下かを歩いて行った。

「……お、おい……」

──そして、昼休み。あの事件が起こった。

＊

──やっぱり、やっぱり『手紙』もこの『本』も『栞しおり』もっ！

本当だったんだ……本当だったんだ!!

学校では事じ情じよう聴ちよう取しゆの対象となった一部の生徒をのぞいて、全校生徒に帰宅が命じられたが、オレは昨日と同じように、旧校舎へと足を向けた。

いつもの教室には、ほぼ昨日と同じメンツが集まっていた。

そして少し遅れてＢビー子コがやってくる。

「──ねえ、誰が教えたの？　──誰が裏切り者なのよ！」

……裏切り者、か。Ａエー弥ヤが裏切り者？

いや、だとしたらＡ弥のところには手紙は届かないはず……。

でもそれすらも裏切り者だからだとしたら？

オレ達たちみんなに終シユウ焉エンノ栞シオリが本当であると伝えるための演出だとしたら!?

わからない、Ａ弥！　わからないよ!!

頭の中でＡ弥の言葉がリフレインする。

『最近Ｂ子のニセモノが現れるんだって』

あれが、Ｂ子のことじゃなかったら？

たとえばＡ弥はすでにニセモノになっているとしたら？

確かめなきゃ確かめなきゃ確かめなきゃ！

……結局のところオレ達たちは、現状何もすることが出来ないということを再認識し、今日のところは一いつ旦たん早めに帰宅するという結論に至いたった。

オレは少しだけ教室に寄るといってＡ弥と別れる。

二つの理由があった。

一刻も早く、この本をどこかに捨ててしまいたかった。

そして、Ａ弥と一緒に居ることが、怖かったのだ。

本校舎へ戻ってくる。

さすがにもう生徒は一人も居ないようだった。

表から警察関係らしき人と、記者達の声が聴こえてくる。

足早に階段を上ると、自分のクラスへと向かう。

しかしそこである違和感に気が付く。

──明らかに鞄かばんが軽い。

先程までの重量感がいつの間にか消え去ってしまっている。

廊ろう下かの片かた隅すみで鞄を恐る恐る開くと、そこにあるはずのものが無く、あるはずのないものが存在していた。

──本が消え、代わりに一通の『手紙』がそこにはあった。

「……っ!!」

　思わず鞄から手を離す。

　……まさか!?　手紙はＡエー弥ヤの所にいったはずじゃ!?

　二通目!?　いや、もしかして……。

　……やっぱりＡ弥は──!!

Re：不在着信Ⅳ

　その日からオレはＡ弥のことを監かん視しし始めた。

　日常的に行っていた盗聴・盗撮はもとより、家の近くまで行って直接Ａ弥の動向を覗のぞくこともあった。

　24時間、ほとんど寝ることもなく、ただひたすらにＡ弥を監視する。

　普段はマメにチェックするメールやＳＮＳなども見ることなく、ただひたすら……。

　しかし、一日が過ぎても、二日が過ぎてもＡ弥には動きが出てこなかった。

　部屋の中でジッとして動かないＡ弥に、ビデオの故障かと思い家に行った程だった。

　……Ａ弥が裏切り者なのか？

　……Ａ弥はすでにニセモノに変わってしまっているのか？

　答えが出ないまま、オレは、自分の神経が日に日にすり減って行くのを感じていた。

　そして、手紙を受け取ってから数日が経とうとしていた。

　無心で眺め続けるディスプレイが、少し歪ゆがんだかと思うと、突然、雑音が聴こえてきた。

『こんばんは。臨時放送です。これまでの犠ぎ牲せい者しゃをお伝

えします』

『今日歩きながら携けい帯たいを見ていた人』

『生活が寂さみしくて和室にうさぎを飼った人』

『万歩計で、一万歩歩くのを達成した人』

『人の手紙を覗いてしまった人』

『続いて、明日の犠牲者をお伝えします』

『ずっと気になってたいたことを本人に直接伝えた人』

『お願いを無視した人』

『学校をサボり一人で遊んでしまった人』

『──今、青ざめてる人』

『明日の犠牲者はこの方々です。ご冥めい福ふくをお祈りいたします。……おやすみなさい』

　無機質なアナウンサーの声が狭い部屋に響き渡る。

　あの日、あの教室で聞いた、あの声だ……!!

　背筋が凍るように冷たくなるのを感じる。

　心臓をヤスリにかけられているように、胸が痛くなる。

　──いよいよ殺される……!!

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だあああ!!

『ゲームの終しゆう焉えんを迎えるには「キツネ」を殺せ』

　旧校舎で聞いた、アナウンサーの声を思い出す。

　…………確かめなきゃ。

　Ａエー弥ヤが、「キツネ」なのか、違うのか、それだけでも確かめなきゃ。

　もしかしたらＡ弥はすでにニセモノに変わってて、どこかに閉じ込められているかもしれない。

　Ａ弥を助けられるのはオレだけなんだ。

「キツネ」を殺さなきゃ……。

「キツネ」を殺して、Ａ弥を助けなきゃ……!!

CHAPTER4
完全犯罪ラブレター

制作者:C太

CHAPTER4

『ニュース速報です。

　本日、○○市で男子生徒が遺体で発見されました』

　ひとりで晩ご飯を食べていると、そんなニュースが流れた。

　あの日以来、テレビの音声には若じゃつ干かん敏感になっていたが、その時は妙に冷静にニュースを聞いていた。

　……あの日以来？　あれ？　あの日からオレは何をしてたんだっけ？

　ここ数日の記憶が、まるで霧きりがかかっているかのように思い出せない……。

　無機質な声でアナウンサーは続ける。

『彼は身体中を刃物によって刺されており。

　手には携けい帯たい電話が握られた状態でした。先日同市内で起こった—』

　手には携帯、か。まるでＡエー弥ヤみたいだ。

　□□Ａ弥。

　Ａ弥はいつも携帯を手にもって、何か打ち込んでいた。

　頭の中で携帯を握りしめたまま、血塗まみれになって倒れているＡ弥の姿が浮かぶ。

「……っ！」

　オレは頭を左右に振ると、ありえないと一人呟いた。

「……ありえない……よな？」

　あまりにもリアルに思い浮かんでしまったＡ弥の姿に、不安がこみ上げてくる。

　━ピロリーン♪

「……っ！」

　突如携帯が鳴り響いた。液晶を見ると近所の同級生からのようだった。

『……聞いた？　今日の事件の被害者Ａ弥だって。Ｃ太、仲良かったろ？　大丈夫？』

　━なんだって？

　Ａ弥が殺された？　まさか……そんなことあるわけない。

　だってＡ弥の事はオレは毎日…………。

　だめだ、ここ数日の記憶がどうしても思い出せない……。あの死体は……。

　━ピロリーン♪

　またしても携帯が鳴り響く。

　液晶を確認すると、それはツイッターのリプライを知らせるプッシュ機能だった。

　プッシュ機能がいつのまにオンになっていたのか不思議に思いながらも、オレはアプリを起動させた。

『わたしは今、あの場所にいるの』

……？

謎の鍵かぎアカウント「ｍｅａｒｒｙ１７１３」からのリプライが表示された。

フォローした覚えのないそのアカウントは、フォロー１フォロワー１……つまりオレとしか繋がっていなかった。

……なんだよこれ。

背筋が冷たくなるのを感じた。じっとりと、嫌な汗が背中を伝う。

オレは気持ち悪くなってしまって、晩ご飯を残し自分の部屋へと戻った。

ベッドの隅に膝を抱えるように座り、自問自答を繰り返す。

Ａ弥を殺したのは一体誰だ……？　あんなにも惨たらしく！

あんなにもあんなにもあんなにもあんなにもあんなにもあんなにも……!!

それからおそらく数時間後。

オレはふと旧校舎のメンバーの事を思い出していた。

「……そうだ……知らせなきゃ……」

オレは携けい帯たいを取り出すと、まずはＢビー子コに連絡を取ろうと思い電話をかけた。

プルルルルルルル……ザザアア……プルルルルルルル……ザザアアアア……。

　なんだ？　やけにノイズが入るな。

「……も、もしもし？」

　Ｂ子だ。随分と声が怯えている。

「………………Ａエー弥ヤが殺された……」

　プチッ、ツー、ツー。

　──それで……と続けようとしたところで回線が切れる。

　あれ？　おかしいな。

　──ピロリーン♪

　かけ直すためボタンを押そうとすると、またしてもリプライが通知された。

『わたし、今、窓から月を見ているの』

　……月？

　差出人はやはり先ほどの謎のアカウント。

　──ピロリーン♪

『あの夜と、同じ月の色ね』

　──あの夜？　あの、赤い、月の、夜？　あの、赤い、赤い、月

の……。

　フラッシュバックする。断片的で、まるでチャンネルが壊れてしまったかのように、色のない景色だ。

　オレは部屋の中にあったハサミを拾って反撃しようとするＡ弥の身体を蹴り、腕を踏みつけ、「無駄だよ」「オレの勝ちだ」と言ってやる。

　先ほどＡ弥がぬいぐるみにしたのと同じように、腹をカッターナイフで一刺しする。続いてもう一刺し、もう一刺し、もう一刺し…………。

少しづつ、パズルのピースが組み合わさっていくように、あの日の世界が色を取り戻す……。そうだ俺はあの日……。

＊

午前３時になろうとしていた。歩いて本当に数分もしない距離に、Ａエー弥ヤの家がある。

何度も来たこの家が、今日は一段と違って見える。

まるで古くから人が住んでいない廃はい墟きょに入り込む感覚。

隠かくしてある鍵を手に取ると、慎しん重ちょうに、慎重に家の中へと侵入した。

タイミング悪く携けい帯たいが震え、心臓が高鳴る。

落ち着け、落ち着け……。オレは電源をオフにした。

しかし突とつ如じょとして二階から足音が聞こえて来た。

やばいと思って台所の隣、リビングに移動する。

□□Ａ弥だ。そして、Ａ弥はなぜか、あのぬいぐるみを抱きかかえている。

……一体、何を？

そのぬいぐるみは、オレと、Ａエー弥ヤとの思い出のぬいぐるみだろう？

「……またか」

　感情のこもった視線を向けていると、突如としてＡ弥がそう呟つぶやいた。

「……っ！」

　──まさか、気付かれた!?

　Ａ弥が台所で視線を泳がせる。

　見つかれば、殺される。

　あのクラスメイトのように……殺されてしまう！

　心臓の音が聞こえるのではないかという程、強く鼓動する。

　オレは息を殺しながらその様子を伺うかがっていた。

　しかしＡ弥はこちらに気が付いたわけではなかったようで、米こめ櫃びつからお米を少し取り出し、次にコップに塩水を作ると、それらを持って台所から出て行った。

　ほっとため息を吐く。

　でも、Ａ弥は一体何をしてると言うんだ？

　オレは、さらに息を殺してＡ弥との距離を縮ちぢめながら、彼の行動を監かん視しした。

　Ａ弥はさらに部屋を移動する。

　いつの間にやら縫ぬい針と赤い糸、ハサミとカッターナイフを手にしていた。

　押し入れのある部屋へと移動すると、しばらく考え事をしているかのように黙り込んだ。

　そして意を決したように顔を上げると、ぬいぐるみの腹を切り割

き、綿を取りだす。

「……っ!!」

　突然の行動に、オレは目を疑うたがう。

　Ａ弥は無表情なまま、黙々と作業を行っていた。

　ぬいぐるみから詰め物を取り出すと、その代わりにお米と爪を切って入れ、へたくそに縫い合わせる。手や足、口にも赤い糸を縫い合わせていく、その見た目は、とてもグロテスクなものに見えた。

　……オレの、オレのあげたぬいぐるみが……。

「まるで、血管みたいだな」

　Ａ弥はポツリと呟くと、次に、塩水を持ったまま、押入れの奥にそれを持って行った。

　そして出てくるとコップは手から消えていた。

「あとは、ぬいぐるみの名前ね……」

　Ａ弥は少しだけ考えるような素振りを見せ、小さく呟いた。

「……Ｃシー太タ」

「□□……!!」

「━お前の名前はＣ太だ。……さて、はじめるか」

　……なんだって……？

Ａ弥はそこから明かりのついている部屋を回ると家中の電気を全て消し、カーテンを閉め、リビングにあるテレビだけをつけた。

「最初の鬼はＡ弥だから。最初の鬼はＡ弥だから。最初の鬼はＡ弥だから──」

　相変わらず無表情のままそう告げると、浴よく槽そうに行き、風ふ呂ろ桶おけの中にぬいぐるみを沈めた。

　水が暗闇の中の僅わずかな光を反射させて、まるで笑っているかのようにＡ弥の表情を歪ゆがめた。

　オレはこれまでに感じたことの無い程の寒気を感じた。

今にもバレてしまうのではないかという程近くまで接近していたが、オレはもうそれを気にしなくなっていた。

しかしＡエー弥ヤは気が付かず必死に作業を続ける。

台所へと戻ると、Ａ弥はカッターナイフを手にとって、目をつぶり十秒程数える。

「もういいかい？」

そう言うと、風呂場へといって、桶おけを開け、ぬいぐるみを取りだし。

──腹を刺す。

……………………!!

「次はＣシー太タが鬼の番。次はＣ太が鬼の番。次はＣ太が鬼の番……」

Ａ弥はそう言うと、台所へと戻りカッターナイフを置き、塩水を置いておいた押し入れの部屋へと戻った。

オレはＡ弥が居なくなった後の風呂場へと足を運ぶ。

オレがあげた、あのぬいぐるみは、風呂の水でびしょ濡ぬれになっていた。

腹から米粒を撒まき散ちらし、不ぶ器き用ように縫ぬい付けられた赤い糸がまるで血管のように惨むごたらしく巻き付いている。

「……そっかぁ」

──これでようやくわかった。

Ａ弥はもう、居なくなっている。

　あれはＡ弥じゃない。きっと明日にはオレをこうやって殺そうと思ってるんだ。

　危ないところだった。まったくもって危ないところだったよ。

　だってそうだろう？　オレのことを、幼おさな馴な染じみで、唯ゆい一いつの親友のオレのことをさ、こんな風に、殺そうってしないだろう？　これはもう疑うたがいようの無い、微み塵じんの疑いようの無い証拠だよ。とにかく今、Ａ弥のあの形をしているアイツはＡ弥じゃない。

　アイツこそが「キツネ」……つまり、裏切り者。

　──アイツを殺せば、ゲームは終わる。

　Ａ弥はまだ大丈夫なのだろうか？　とにかく、このくそったれなゲームを終わらせて、早くＡ弥を助けなくては。

　Ａエー弥ヤを助けることが出来るのは、オレだけなんだから。

　意を決してアイツの所へと向かう。

　台所を通ると、ちょうどアイツが置いて行ったカッターナイフが目に入った。

＊

どこに居る？　どこに居るんだい？

Ａ弥の形をしたくそ野郎。

ぶっころしてやるから、出てこいよ。

ギッ。ギッ。

廊ろう下かに足音が響いている。

ほら、聞こえるだろう？　オレはもう正せい々せい堂どう々どうと戦ってやるよ。

あのぬいぐるみみたいに無抵抗で殺されるなんて思うなよ？

返り討ちにしてやる。

ギッ。ギッ。ポタ。ポタ。

カッターナイフから水すい滴てきな垂れる。なんだか血液みたいじゃないか。ふふっ。

押し入れのある部屋へとたどり着くと、すぐそこに居るのがわかった。

押し入れの中に、隠かくれていやがる。

ああ、懐かしいなあ、Ａ弥とも、よくこうやって隠れんぼをしたっけ。

Ａ弥は気管が弱かったから、長時間埃ほこりっぽいところに居ると、咳せきが止まらなくなるっていうのに、そんなこともしらないの？

ほら、もう出てこいよ。

　ゆっくりと押し入れの襖が開く、中にはＡ弥の顔をしたアイツが見えた。

「──なんで君が……!?」

『──みーつけた』

……そうだ、オレが、オレがＡエー弥ヤを殺したんだ。

『ぬいぐるみを切り裂くみたいに、カッターナイフを使ったのね』

　ぬいぐるみが、切きり裂さかれる。オレ達たちの大事な大事なぬいぐるみが。

『アナタの名前を呼んでたのにね』

　オレの名前を呼んで、そのまま切り裂く。

『裏切り者だって、勘違いしたんでしょう？』

　だってＡ弥が裏切り者なんだ！　オレはそう……そう思ったから、そう思ったから殺したんだ……！

　──でも違った。Ａ弥は裏切り者じゃなかった。殺してすぐにわかった。

　フフフフフ……。そうさ、その通りだよ、オレはすぐに怖くなったんだ。『終シユウ焉エンノ栞シオリ』が、オレにどんな罰ばつを与えてくるか。だから騙した。自分自身を。自分自身すら覚えていない殺人が誰にわかる？　そう思ってたのに、まさか見てたヤツが他にもいたなんてね。

　──ピロリーン♪

『……わたし今、アナタの部屋の前にいるの』

　来いよ、殺してやるよ。あの時、Ａ弥を殺したみたいに。

「そうさ、オレがＡ弥を殺したんだ!!　罰を与えるなら、出てこいよ!!」

　──ピロリーン♪

　これまでと同じく、プッシュ機能だと思ってボタンを押すと、それは着信だった。

オレは間違えてその電話に出てしまう。

『……わたし今、アナタの後ろにいるの』

『ニュース速報です。

　本日、○○市で男子生徒が遺体で発見されました。

　彼は身体中を刃物によって刺されており。

　手には携けい帯たい電話が握られた状態でした。

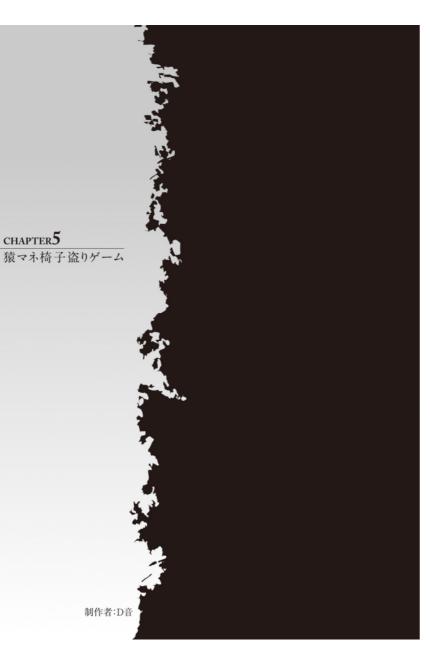
　先ほど付近の住宅で発見された死体と、まったく同じような状況で発見されたため、警察では同一犯による殺害の可能性があるとして、捜査を進めております。

　──それからもうひとつ、間違った回答には罰則が与えられるので、くれぐれもご注意ください。それでは、次のニュースです……』

　部屋の隅で一枚の手紙が風に揺れる。そこにはただ一言こう書かれていた。

《メリーさんからの電話には出るな》

CHAPTER5
猿マネ椅子盗りゲーム

制作者：D音

CHAPTER5

猿さるマネ椅い子す盗とりゲームI　□落ちかけの正せい鵠こくー

　──初恋は女の子だった。

　彼女の名前はリリカ。お母さんに買ってもらった……お人形の、女の子。

「リリカ、今日も素敵ね」

『そんなことないわ』

　リリカはとても控ひかえめでおしとやか。

「リリカ、空はどうして青いのかしら？」

『その方が美しいからよ』

　リリカはとってもかしこい。

「じゃあ夜はどうして暗くなるの？」

『そうしないと星が見えないじゃない？』

　そしてロマンチスト。

綺き麗れいで、かわいくて、頼りになって……。

　私にとっての理想こそが、リリカだった。

　いつしか私はリリカそのものに近づきたいと思うようになっていた。

　お人形が着るような素敵な服を着て。

　お人形のような素敵な髪型をして……。

　──そして、私は程なくして思い知ることになる。

　私はリリカのように綺麗でもないし、かわいくない。

　私はリリカにはなれないのだ。

　それがわかった日には、一日中泣なき喚わめき、リリカを問い詰めた。

　しかしいつものように優しい声を掛けてくれることはなかった。

　そして、その日から、私はリリカと話すことも、なくなった。

　──これが私の初恋の話、そして、失恋の記憶。

　時が経たち、高校生になった。

　私はどちらかというと普通よりも少しおとなしい、クラスでもまったく目立たないような生徒になっていた。

特に仲の良い友達が居るわけでもなく、部活に入っているわけでもない。

　これから先の人生も今までと変わらず、平へい穏おんなまま終わっていくと、十代になったくらいから思っていた。

　どこかの雑誌で、「恋すれば女の子は変わる」だなんて書いてあったが、私には、男子がとても馬鹿らしい人種に見えて、恋の仕方も、兆きざしも見えてこなかった。

　──そんな私にあるとき事件が起こる。

　ある日の放課後のことだ。何気なく裏門の周りが汚れていたのが気になったので、すぐ近くの物置小屋から掃除道具を取り出し、パッと片づけをしようとした時だった。

「──私も手伝うわ」

　澄すんだ綺麗な声。振り返ると、そこにはかわいらしい顔立ちに、快活そうなショートカット、薄いピンクの唇にまっすぐな眼まな差ざしが印象的な、素敵な女性が立っていた。

「あ……えっと、あの……」

「裏門のところでしょ？　私も今気になってたんだ」

「……あ」

「……どうかした？」

「え……あの……えっと」

「たしか……同じ、学年だよね？」

「う、うん……」

「とにかく！　さっさと片付けちゃおう！」

　屈くつ託たくの無い笑顔。

　そして、私の手をそっと握ると裏門へと足早に移動する。

　……些さ細さいなことで、恋は始まる。

　私はすっかり彼女に恋をしていた。

　彼女のことは以前から噂では聞いていた。

　というか、学年の中でも知らない人は居ないだろう。

　才さい色しよく兼けん備び、眉び目もく秀しゆう麗れい。

　誰もが完かん璧ぺきと言う程の美少女だった。

　噂では入学して以来たくさんの男子生徒が彼女に告白をし、そして断られてきたらしい。

　あの日、掃除が終わるとすぐに彼女は帰って行ってしまったが、その日以降、廊ろう下かなどですれ違うとにっこりとこちらに笑顔を向けてくれるのだった。

　私にとって彼女は、初めて生身で完璧だと思う、理想の女の子だった。

　彼女に近づきたい。

彼女のことをもっと知りたい。

なんて素敵なことなんだろう。

恋をするだけでこんなにも日々の生活は楽しく感じることが出来るのだ。

ああ、私にこんなに胸が躍おどる日々が来るなんて、思いもしなかった。

私はそれから常日頃、彼女の行動を目で追っていた。

お話をしたい！

もっと彼女のことが知りたい!!

そう思う一方で、ひとつだけ気がかりなことが私にはあった。

──リリカの件以降、私が感じているある種のトラウマである。

完かん璧ぺきすぎる相手と、私との間に、埋うめ難がたい断だん絶ぜつを感じた時、私はとてつもない絶望に直面する。

その思いがあって、なかなか近づくことは出来ず、もどかしい日々が続いていた。

*

結局特にそれから何かがあるわけでもなく、日々が過ぎていった。

私はそれでも長くくすぶる恋の熱から抜け出せずに、彼女のことをいつも視界の片かた隅すみで追っていた。

そんなある時のこと、彼女の雰ふん囲い気きに少しの変化があった。

　最初は、最近まで学園内に流れていたＢビー子コに関する噂のせいかとも思ったが、明らかにこれまでとは雰囲気が違った。

　ずっと見て来たからわかる。

　あれは、これまでのＢ子とは違っている。

　私は気が気じゃなくなって、思わずある日の放課後、彼女の後を追いかけた。

　彼女は裏門の方へと向かうと、そこから旧校舎へと向かって行った。

　旧校舎は今ではほとんど倉庫のようにしか使用されておらず、次第に人ひと気けがなくなっていく。

　こんな所で一体何を……？

　私は一定の距離を保ちつつ、気付かれないように後をつけた。

　そして、Ｂ子はある一つの教室へと入って行った。

　もともとは音楽室として使われていたはずの教室だ。

　恐る恐る教室の扉とびらの隙すき間まから、中の様子を伺うかがってみる。

　──そこにはＢビー子コと、二人の男子生徒が居た。

「まったく！　なんでまた私の噂が流れてるのよ！」

「……知らないよ？」

「あはは、Ｂ子ちゃんは有名人だからね～」

　男子生徒のうちの一人は根暗で卑ひ屈くつな印象の男子。あまり見たことがない生徒だった。

　もう一人は何となく見たことがある気がする、どちらかというと人当りのいい、良識的な生徒という感じの男子生徒だった。

　まずＢ子が男子生徒と一緒に居ることに驚いたが、しかし何よりも、Ｂ子の表情、口調、そのどれもが今までに見たことの無いもので、そこに驚きを隠かくせなかった。

　━私はその表情を見て、ただ、かわいいと感じた。

　これまで完かん璧ぺきなモノの象徴だったＢ子が、あんなに生き生きと、感情を露あらわにしている。

　それは、私にとってＢ子はリリカと違う、生身の人間であることを理解させたのだった。

　━ガタッ。

　思わず教室の扉とびらに手が当たってしまう。

　男子生徒二人はこちらを向き、Ｂ子はしまったというような顔で振り返った。

「……あれ？　Ｂ子ちゃんの……お客さんかな？」

「――!?　あれ……あなた……？」

　Ｂ子は私の顔を見て少し安あん堵どの表情を浮かべたようだった。

　確かに、クラスメイトどころか、その他の男子生徒にでも見られようものなら、またしても新たな噂が流れかねないこの状況。

　私のような友達もロクに居ないような人間であれば、問題はない。

　冷静に考えればそういった理由でＢ子は安堵の表情を浮かべたのだろうけれど、その時の私はまるでＢ子に許されたような、そんな気分になってしまった。

「あ、ご……ごめんなさい、人気の無い旧校舎に行くところが見えたから……つい」

　私は精一杯の笑顔でそう言った。

　Ｂビー子コは軽くため息をついてから答える。

「……そっか、ごめんね、心配してくれたんだよね？　ありがと」

「……知り合い？」

　根暗そうな男の子がこちらをジトッとした目で見ながら無ぶ愛あい想そうに言う。

「……うーんそうだね。あ、でもまだ名前聞いてなかったや。私はＢ子、あなた、名前はなんて言うの？」

「□□Ｄデイー音ネ……」

　私は答える。きっとこの時も引きつった笑顔になっていただろ

う。

「そっか、Ｄ音ちゃん、あの～……えっと、説明が難しいんだけど、今日ここで見たことは、そのえーっとね……」

　Ｂ子は何か言いづらそうにもじもじとしている。

「……だ、大丈夫！　ここでのことは何も言わないから」

「えー？　別に何もやましいことしてるわけじゃないじゃない」

　もう一人の男子生徒か茶ちや化かすように笑顔で言い、それをＢ子がキッと睨にらんだ。

「……あ、でも……」

　私は少しだけ大きく息を吸うと、こう続けた。

「──私もたまに、来てもいいかな？」

　その後、男子生徒二人の名前もＢ子から教えてもらい、その日から、私は旧校舎のメンバーの一人になった。

　最初は一体何の目的のために集まっているのかわからなかったが、どうやらオカルト研究会のようなものらしいと、何回目かの時にようやく理解した。

　私は特にオカルトのようなものに興味があったわけではなかったが、ここに居る時のＢ子はとても楽しそうだったし、何よりもＢ子と話すことが出来るのはここでしかなかったので、旧校舎へと足しげく通かよった。

　私は、知れば知る程Ｂ子の事を好きになり、Ｂ子も、私の前で生き生きとした表情でしゃべってくれるようになっていった。

猿さるマネ椅い子す盗とりゲームII　□貴方の願い事ー

　それからしばらく経たって、私はすっかり旧校舎のメンバーのことを理解し始めていた。

　どうやら、みんなそれぞれに癖くせのあるメンバーのようだった。

　私はＡエー弥ヤにもＣシー太タにもそれぞれ違った意味で苛いら立だちを募つのらせていた。

　──そして、ある日の放課後の旧校舎。

「……お」

「……あら」

　旧校舎でＢビー子コが来るのを待っていると、Ｃ太が先にやってきた。

「やあ、Ｄデイー音ネちゃん、今日は早いんだね？」

　Ｃ太はいつも通りの笑顔で話しかける。

　ふつふつと苛立ちが込み上げるのを感じた。

「ええ、Ｃ太さんとお話したかったので」

　私はニッコリと笑ってＣ太の方を向いた。

　ふふふ、戸と惑まどった顔をしてる。

「……ごめん、Ｂ子と……じゃなくてかな？」

「あら？　Ｂ子ちゃんとはもちろんお話したいですが、Ｃ太さんともお話してみたいです」

「……そっか。何かな？」

　私は悪戯いたずらっぽい笑顔のまま言った。

「……私、私とＣ太さんって似てると思ってるんです」

「ん？　どういうことかな？　どちらかというと僕は、Ａ弥とＤ音ちゃんの方が似てると思うけど？」

「それは表面上でしょ？」

「……？」

　私は顎を上げ、脚を組みかえながら続けた。

「……誰かに寄りかからないと生きていけない」

「……何言って……？」

「本当はわかってる。自分は空くう虚きよな存在だって。誰かの中に自分の存在意義を見み出いださなければ、生きていることも出来ない存在だって。自分は本当は無意味で、無力で……」

「Ｄ音ちゃん？　何を言って──！」

「まだ短い期間だけどね、あなたのこと見てると腹が立つの。まるで……私の鏡みたい。随ずい分ぶんと方向性は違うみたいだけど。あなただって気が付いているんでしょう？　もしも相手が自分のことを必要としなくなったら。いや、もしかしたらもう必要ないのかもしれない、ただ、それを確かめる程の勇気もない。そして自分の──」

「──黙れ」

　Ｃシー太タはいつもからは想像もつかない程低い声を出した。

　随ずい分ぶんと追い詰められたみたい。

「……うふふ冗じよう談だんです。私これでも、Ｃ太さんとは仲良くやって行きたいなって、そう思ってるんですよ？　あなたは別に目的ではないかもしれないですが、お互いにとってのメリットを、理解出来ないことはないでしょう？」

Ｃ太に敵意をむき出しにした視線で睨にらまれていると、物音が聞こえて来た。

「……あれ？　Ｃ太」

「あ、Ｄデイー音ネ。早いんだね？　何してるの？」

　そこにはＡエー弥ヤとＢビー子コの二人が居た。

「Ｂ子ちゃん！　うふふ、Ｃ太さんとちょっと世間話していただけですよ」

「そうなんだ？」

「ね？　Ｃ太さん」

　そういってＣ太に笑顔を向ける。

「……Ｃ太？」

「…………ああ、ちょっとした世間話をね」

　Ｃ太はそう答えると、いつも通りの笑みを浮かべた。

　こうやって人と接してみて初めてわかったことだが、私は相当に底意地が悪い人間のようだった。

　人の神経を逆なでするのが好き。

　気が付いているけれども目を背けているものを指摘されるだけで、人はこんなにも苛いら立だちを募つのらせることが出来る。

　自分と、Ｂ子以外の人間からはどう思われたって構わない。

　そういった気持ちになってしまうことを、私はそのうち抑えきれなくなるのではないかと、自分のことながらまるで他人事のように恐怖するのだった。

＊

そしてまたある日の昼休み。私は一人屋上の奥の建物の陰かげに座っていた。

　今日は生あい憎にくの曇どん天てんだが、それはそれで悪くない。

　きっとそろそろ来るころだろうと思っていると、屋上の扉とびらが開く音がし、しばらくすると近くに人影が近づいてきた。

「Ｂビー子コちゃん～」

「……やっぱり居るのね……」

「え～偶ぐう然ぜんですよ～」

　Ｂ子はやれやれというような表情をするが、すぐに笑顔に変わると私の隣に座った。

「でもでも、いつもはＢ子ちゃんと話すのもままならないから、こういうのは嬉うれしいです」

「なんで話しかけないの？」

「……だって、Ｂ子ちゃんの周りには、いつも人がいっぱいなので……」

「ん～……まあ確かにね～……」

　取り巻き……という程でもないが、Ｂ子の周りには常に誰かが居る。

　別のクラスの私には、話かけるようなきっかけは無いのだった。

「あんまり気にしなくていいんだよ？」

「気にしてないです。ただＢ子ちゃんのこと好きだから、お話出来るとうれしいだけです」

　そういって私はにっこりと笑う。

　Ｂ子は苦笑いをして、崩れてきそうな空を眺めた。

　私のむき出しの好意に対して、最初は戸と惑まどっていたＢ子だったが、次第に諦めたのか、冗じよう談だんだと思っているのか、特にツッコミをすることもなくなっていた。

　私はそんな関係が少し嬉うれしく、そしてほんの少しだけ悲しかった。

『□□Ｂ子のニセモノが現れたんだって』

　突とつ如じよ、屋上のどこかからそんな言葉が聞こえた。

　私達たちが居るのは屋上の、少し奥まった所にある小さな建物の陰かげなので、話をしている人達からはちょうど死角になっているようだった。

『ニセモノってどういうこと？』

『なんかね、Ｂ子が家に居る間に夜に遊び歩いてるらしいよ？』

『え？　何？　お化け的な？』

『わっかんない。でもさ、Ｂ子イイ子だから、溜たまってそうじゃん？』

『溜まってるって何が!?』

『あははそういうんじゃないし！　でも溜まりに溜まった遊びたい欲求が～とか』

『何言ってるかわかんな～い』

『でもさ、ホント見た子が居るらしいんだよ～……』

　──私はすぐに、Ａエー弥ヤの流した噂だと思った。

　噂だけならまだしも、オカルトめいた話が合わさっているとなれば、間違いはない。

　Ｂビー子コもすぐにそれを感じとったようだった。

「あいつめ……」

「うふふ……怒ってるＢ子ちゃんもかわいいです」

「……私、放課後は真っ先に旧校舎に向かうから」

「了解です」

　昼休みが終わりを告げる頃、再び空は崩れ始め、雨がノイズのように学校を包んだ。

*

　──そして放課後、私はＢ子と合流すると、すぐに旧校舎へと向かった。

　二階にあがり、元音楽室のドアを開けると、そこにはすでに先客が居た。

「……っ。おや？　今日はずいぶんとお怒りだね？」

　Ｃシー太タだ。私のことを見て、一瞬だけ気まずい顔をしたが、Ｂ子は気が付かなかったようだ。

「……あんたの幼おさな馴な染じみはどうにかならないの？」

　私とＢ子は自分の荷物を置きつつ、なんとなくいつもこのあたりという席に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

「……あんたねえ……」

　Ｂ子がＣ太に詰め寄ろうとしたところで、再び教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａ弥だ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　Ｂ子は怒りを必死に抑えながらも、Ａ弥に睨にらみ寄っていく。

「ほうら、火の無いところには煙けむりが立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっと偽者だと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「でも、Ｂビー子コちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ａエー弥ヤの胸倉を掴つかもうとしたところで、私はなぜか慌ててそう言う。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　私は精一杯屈くつ託たくの無い笑顔を浮かべる。

　どうやらその試みは成功したようで、Ｂ子は先程まで座っていた自分の席へと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤデイー音ネに弱いね」

「うっさい」

　Ｃシー太タはＢ子を茶ちゃ化かすようにして話を続ける。

「Ａ弥だって、何も無意味な嘘うそをついたわけじゃないじゃないか」

「そうですよ、私達たちの活動趣しゅ旨しに非常に合ってると思います」

「活動趣旨とか……そんな大たい層そうなもんじゃないでしょうが」

　──確かに、そんな大層なものではなかった。

　しかし、Ａ弥の発見をきっかけに、私達の活動はにわかに活発になっていた。

　──その発見というのが、『十年前の日記』だ。

　十年前、この旧校舎で同じように「オカルト話」を集めていた生徒達による、交換日記。

　彼らが集めた話は、これまでに聞いたことの無いものも多かった。

　そしてその中で、『終焉オワリノ本』と『終シユウ焉エンノ栞シオリ』という、今でもこの学校に伝わる噂話について触れられていた。

彼らはこれらを手に入れ、そして……━死んだ。

これまでは週に一度集まるか集まらないか程度だったのだが、最近はほぼ毎日のように誰かしらがこの教室にいる。

数日前も、実際に日記に書いてある方法で、こっくりさんを行おうと試みたそうだ。

その時は私はいなかったのだが、いざ始めてみるととてつもない感覚に襲われて、恐怖のあまり途中でやめてしまったらしい。

今日は旧校舎のメンバーが全員集まっている。

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

Ａエー弥ヤが唐とう突とつに切り出す。

「気のせいなのか、もしくは何かの怪かい奇き現象なのかもしれないけど」

「……怪奇現象？」

Ｂビー子コはガタリと椅い子すを立ちあがると、Ａ弥に向いて座り直した。

「そう……最近朝起きるとね、確実に誰かからの視線を感じるんだ」

「家族……とかではなくてですか？」

「うん、両親は早く出かけるからね」

「じゃあ誰かが外からみてる~とか？」

「そういうのじゃなくてもっとこう、背後からの視線を感じるんだよね……。振り向いてみても何も居ない、そういうことが頻ひん繁ぱんに起きてるんだ」

「……ふーん」

「〝座ざ敷しき童わらし〟とか、そういったものかな……」

「〝メリーさん〟だったら電話とかかかってくるんだよね？」

「最近のメリーさんはＳＮＳとかも使うらしいよ」

「うーん……」

　Ａ弥がひとつ呼吸を置いてから、さらに続けた。

「ひとつ、気になることがあるんだけど」

「なに？」

「この間、こっくりさんをやったじゃない？　僕とＢ子とＣシー太タの三人で……」

「ああ……」

「──翌日からなんだよね、視線を感じるようになったの……だからこれは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

　Ａ弥が、突とつ如じよとしてその言葉を口にし、さらに続ける。

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

「失敗って……」

「『終焉オワリノ本』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が静せい寂じやくに包まれる。

　私は、彼の次の言葉を予想し、本当に苛いら立だたしいと、ただそう思った。

「……もう一度やろうよ」

*

　こうして、私達たちは日記に書いてある通り『終シユウ焉エンノ栞シオリ』を手にするため「こっくりさん」を始めた。

「これから、みんなにひとつずつ質問をしていく。まずは誰か、僕に質問して？」

「……じゃあ、Ａエー弥ヤの昨日の晩ばん御ご飯はんは肉である？」

「……なにそれ？」

　Ｂビー子コの質問に、Ａ弥は呆あきれたような顔をしている。

「……だって、突然質問って言われたって」

「あ、動き出した」

「…………「はい」だって……何食べたの？」

「ハンバーグだけど……」

「じゃあ合ってるね……こっくりさんこっくりさん鳥とり居いの位置までお戻りください」

「ハンバーグかー、Ａ弥の家のハンバーグ美お味いしいんだよね、また食べたいな」

Ｃシー太タが小声で呟つぶやいている。

　私はというと、なんだか不思議な気持ちだった。

　基本的に心は落ち着いているのだが、嫌な予感がゆっくり髪先をざわざわとなでるようだ。

「次はじゃあ、Ｂ子ね……Ｂ子に好きな人は居ますか？」

　Ａ弥が突然、Ｂ子にとんでもない質問を投げ掛ける。

「ちょっ！　ちょっとなに聞いてるのよ！」

「ほらほらＢ子ちゃん、落ち着かないとダメだよ？」

「……あ、あ……もう……」

　Ｂ子はとても動揺していた。

　Ｂ子の好きな人……か、私は……私は…………。

　十円玉はまっすぐに動いて行き、そして止まった。

「「はい」だって……ふーん……」

「ちょっとＡ弥！　聞いといてなんでそんな反応なのよ！」

「よく考えたらそんなに興味無かったから……あ、こっくりさんこっくりさん、鳥とり居いの位置までお戻りください」

　Ｂビー子コには好きな人が居る。

　私は、そんなことわかっていた。

　だってそうでしょう？　私は誰よりもＢ子のことを見ているのだから。

　でも、私は……。

「……!!　つ、次はＤデイー音ネ行くわよ！」

「……いいですよ？」

「Ｄ音には好きな人が居ますか!?」

　Ｂ子は私の目を覗のぞきこむと、まるで自分の恥ずかしさを隠かくすように、そう質問した。

　その仕草さえも、かわいいと、そう思ってしまう。

「そんなつまらない質問でいいんですか？」

　十円玉はまたしてもまっすぐに「はい」に向かって動いて行く。

「へー、Ｄ音ちゃんにも好きな人が居るんだね」

「え？　私、Ｂ子ちゃんのことが大好きですから」

　そう言って、にっこりと笑い、Ｂ子を見つめる。

　Ｂ子にはただの冗じよう談だんだと、思われてるということも、理解していた。

　そのようにして、こっくりさんは進行していき、いよいよ最終局面に近づこうとしていた。

　次はＣシー太タが質問に答える番。

「次は……Ｃ太ね。うーんどんな質問がいいかな」

「あのさ、こういう質問はどうかな？」

　Ｃ太はＡエー弥ヤを見ながらこう言った。

「……オレの家に昔あったぬいぐるみは、ペンギンのぬいぐるみだ」

「え？」

「どういうこと？」

「……あ、動き出した」

　こっくりさんは「いいえ」へと動いて行った。

「Ｃ太、これってどういう……？」

「こっくりさんがちゃんと当たっているか、わからないじゃない？　だから、Ａ弥も知っている質問にしようと思ってね。……Ａ弥、オレの家にあったぬいぐるみは、何のぬいぐるみだったか……わかるよね？」

「…………」

　Ａ弥は少しだけ考えて、こう言った。

「……うさぎ……だったよね？」

　Ｃシー太タの顔が喜びとも悲しみとも判断出来ない表情に歪ゆがんでいる。

　Ｂビー子コは状況がよく呑のみ込こめていないようだった。

　私は、Ｂ子に向かって声を掛けようとした……その時だった。

　──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「「「「「□□」」」」」」

　突とつ如じょ、旧校舎に設置されたままの古いブラウン管のテレビがノイズを立てながら点灯した。

「何」

「きゃああああああ！」

「……まさか！」

「…………」

『──ひとりの裏切り者「キツネ」によってゲームは始まった』

　無機質な声が教室に響く。

　まるで脳に直接流し込まれるかのような不快なノイズ。

『抜け出したければ以下の条件に注意をし、終しゆう焉えんを迎えよ

　──さあ、楽しい終焉ゲームの始まり始まり』

・ゲームの終焉を迎えるには「キツネ」を殺せ。

・「キツネ」を見つけることが出来なければ、それ以外は死ぬ。

・「キツネ」を探しながら、こっくりさんのお願いに従え。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

・このゲームは終焉を迎えるまで絶対に抜け出すことは出来ない。

　淡々と語られる意味のわからない言葉の羅列。

　質の悪い冗じよう談だんだと笑い飛ばしてやりたいのだが、絶対的な恐怖が、みんなに、これが只ただ事ごとでないと告げていた。

「…………っ」

──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

　Ｃシー太タがようやく声を絞しぼり出そうとしたところで、再び激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

──そして訪れる静せい寂じゃく。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……わからない」

「……「キツネ？」「裏切り者」だって……？」

「……た、質の悪い冗談でしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、私達たちは学校を後にした。

──そして次の日、学校の同級生が上半身と下半身とをバラバラにされ、死んだ。

昼休みに死体が発見されると、学校はすぐに不思議な空気に包まれた。

警察が現場検証を行う間、生徒達はみな教室に待機させせられていたのだが、どこかテレビの中の出来事のように現実感の無いクラスメイトは、昨日までの私達のようにどこか浮かれた雰ふん囲い気きを醸かもし出していた。

一体どういうこと？　これは『終シユウ焉エンノ栞シオリ』の仕業なの？

私はどこか冷静な気持ちでいた。

そして、あろうことかこの状況なら、Ｂビー子コともっと仲良くなれる。

そんなことばかりを考えているのだった。

きっと今頃Ｂビー子コは怖がっているだろう。私はどうやって慰めてあげたらいいのかしら。

そして一いつ旦たん、事じ情じよう聴ちよう取しゆの対象となった一部の生徒をのぞいて、全校生徒に帰宅が命じられたが、私は昨日と同じように、旧校舎へと足を向けた。

いつもの教室には、Ｂ子をのぞいて昨日と同じメンツが集まっていた。

ほどなくしてＢ子もやってくる。

「──ねえ、誰が教えたの？　──誰が裏切り者なのよ！」

Ｂ子はかなり恐怖でいっぱいいっぱいのようだった。

「私達たちも死んじゃうのかな……？」

「……落ちつけよ」

「これが落ち着いていられるわけないじゃない！」

「……まだ……わかんないじゃないか……偶ぐう然ぜんかも、しれ

ないし……」

「これが偶然なわけないでしょう!?」

「落ちつけって!!」

「…………」

「…………これ以上詮せん索さくして……死にたくないだろ？」

「──っ!!」

「とにかく、誰かが手紙を受け取った……それで、それを見られたってことだろ？」

「つまりさ、全部、ホントだったってこと？　あの……」

「そうだろうね」

「終シユウ焉エンの栞シオリ……」

　しばらくの間沈黙が流れる。耳が痛い程の静せい寂じやく。

「──ねえ……どうすればいいの？」

　Ｂ子が泣きだしそうな声を出す。

「とりあえず、様子見しかないんじゃないかな？　誰かはすでに、手紙が届いてるってことだから……」

「うん、だから、あと一週間もすれば私達の誰かが死ぬ」

「こんな、こんな事件だし、すぐに犯人、見つかるよな!?」

『………………犯人なんて、居たらね』

　私は表面的に怯おびえる振りをしながら、それとなく恐怖を増大させるような言葉を続ける。

　それから、結局のところ私達は、現状何もすることが出来ないということを再認識し、今日のところは一旦早めに帰宅するという結

論に至いたった。

　そして、気持ちの整理がつかないというＢ子と一緒に、私は学区から少し外れたところにある、小さな市立図書館へと向かうことにした……。

　　　＊

「……Ｂビー子コちゃん……」

　心配そうにＢ子を覗のぞきこむ。少し小さ目な図書館なうえに、今日は平日のお昼過ぎということで私達たちの他には利用者はいなかった。

　職員はカウンターに一人いるだけで、本棚の一番奥のこのテーブルに座った私達は、二人きりと言っていい状態だった。

「……大丈夫？」

　私はＢ子の手ての甲こうの上に掌てのひらを重ねて再度訪ねる。

　Ｂ子はその手をゆっくりと離してから「ありがとう」と小声で呟つぶやいた。

「……」

　手、繋つないだままでいいのに。

「……ごめんね。気が動転しちゃった……」

「……ううん」

「なんだろう……夢じゃないんだもんね……夢ならいいのにって、なんか、今でも信じられないっていうかさ……」

「……うん」

「わ、私は、ちょっと好奇心っていうか……でも、ほら、実際には『本』も『栞しおり』も手に入ったわけじゃないし……」

「うん」

「……十年前と同じには……ならないって……信じてるっていうかさ……」

「…………」

「…………」

「……Ｂ子ちゃ――」

「あははごめん！　私みたいな嘘うそつきがさ……嘘の塊かたまりみたいな私が何言ったって無む駄だだろうけどさ……私は、裏切ってないし、裏切りもしない――」

「Ｂ子ちゃん！」

「……っ！」

　ずっと下を向いたままだったＢ子が、ようやく顔を上げる。

　その顔は、怯おびえる小こ鹿じかのようで、とってもかわいらしかった。

　私は再度Ｂ子の手を握る。

　今度は、先程よりもしっかりと。

「――私がＢビー子コちゃんを守るから。だから……安心して？」

　――守る。よく意味がわからない言葉で、根拠も何もない約束。

それでもその言葉はＢ子を落ち着かせるのに少しの効果はあったようだった。

「……ありがとう」

「ううん、私、Ｂ子ちゃんのこと、大好きですから」

そういっていつもと変わらない、精一杯の笑顔を私は浮かべた。

「……そうね、ありがとう。私も好きだよ」

　私は立ちあがるとＢ子の顔に自分の顔を近づけた。そして──

「……嘘うそじゃないですからね？　……あれ」

　──彼女の唇くちびるを奪った。

駅の近くの喫きつ茶さ店てんへと行くと、個室になっている化け粧しよう室しつへと駆かけ込こむ。

　私はＢ子にキスをした後、「今日はもう帰りますね」と言って先に図書館を後にした。

　しかしすぐに家に帰るのは無理だと思い、喫茶店へとやってきたのだった。

　……自分の唇に指を添そわせる。

　鏡に映る中の自分の顔が歪ゆがむ。

　──ファーストキス、しちゃったぁ。

　耳まで熱くなっているのがわかる。

　顔がにやけるのが止まらない。

　今日のお昼、同級生が死んだばかりだというのに、私はそれすら些さ末まつなことだと感じていた。

　──カタッ。

「……？」

　携けい帯たい電話を取り出そうと鞄かばんを引き寄せたところで、違和感に気が付く。

　……何か入っている？

　私は、まったく無防備な状態で鞄を開いた。

「……ヒッ！」

　そこにはまったくもって予想だにしないものが入っていた。

　一通の手紙と──小さな手のミイラのようなもの。

　手首から先だけのそれは、指が五本しっかりとついていて、半開きの状態だった。

　大きさとしては小学生くらいの手のように見える。

　突然の非現実的な物体に、私は恐怖を感じるよりも、まるでまごの手みたいだ、なんて変な感想を持ってしまった。

　席へと戻ると、教科書などで隠かくしながらその手紙をゆっくりと開く。

　そこには、予想外なことが書いてあった。

《──猿さるの手を使って、運命に抗あらがえ》

　手紙には、先程の猿の手が『特殊なアイテム』であるということが書いてあった。

　なんでも、５つだけ、どんな願いでも叶かなえてくれるらしい。

　それを使って、運命に抗あらがい、裏切り者を見つけ出せ……だそうだ。

　確かに少し前、Ａエー弥ヤから聞いたことがあった気がする。

なんでも叶えることが出来る猿の手というアイテムの都市伝説。

でも、話の最後の方が思い出すことができなかった。確か何かあったような気がする……。

「なんでもかぁ……」

私は馬鹿げている、と思いながら、それでも昼間に殺された生徒のことを思い出した。

あれは確かに超常的な力、もしくはこの世界に対するメタ的な力でもないと出来ることでは無かった。

それじゃあ試しに、と私はポツリと呟つぶやく。

「Ｂビー子コちゃんのリボン……欲しいなあ」

—パキッ。

鞄かばんの中から乾いた音が聞こえてくる。

関節を鳴らすようなそういった音。

私はまさか、と思いながら恐る恐る鞄を開いた。

そこには、先程の手首のミイラが相変わらず存在していたが、いつの間にやら親指が数を数えるかのように折りたたまれていた。

—そして、手首の横にリボン。

間違いない、これは、いつも私が見ている……。

そう、先程もすぐ間近で見ていた……Ｂビー子コのリボンだった。

私は再び化粧室に入り、浮かれ気分でリボンを着けると、持っていたハサミで髪の毛を切り、駅前を通り抜けて家へと帰った。

家に帰ると、大事に大事にバックを抱え自分の部屋へと入る。

なんて素敵なことが起きたんだろう。

私は恐怖よりも、嬉うれしさの方が勝っていた。

だってそうでしょう？

最後のお願いを、Ｂ子と私だけ助けてくださいってそういえばいいんだから！

怯おびえることはないじゃない。

最後のお願いを除いて、あと３つも願いごとが叶かなえられる。

私、どうしたいかな？

やっぱり、少しでもＢ子ちゃんに近づきたいなあ。

私は、リリカに話しかけていたあの時のような気分を再び思い出していた。

＊

学校は一週間の休校になった。

一日目は家で過ごしたが、二日目にははすっかりやることがなくなってしまっていた。

私は少しだけ考えると、まだあと３つもあるしと、Ｂ子の靴をお願いした。

　パキッ。

　乾いた音と共に、家の玄関にはＢビー子コの靴が現れていた。

　まるで魔法のよう。私は制服を着て、リボンを着けて、靴を履いて街へと繰り出す。

　学校や、図書館、いろいろな所に行ったあとに、思い立ってＢ子の家の近くへと行ってみることにした。

　確か、このあたりがＢ子の家だったはず。

　目印になるような公園にたどり着くと、ちょうどそこにＢ子が現れた。

　周りを伺うかがうようにこそこそと歩いてくるＢ子を発見し、私は思わず木陰に隠かくれる。

「──ッひ……！」

　一瞬Ｂ子は何かに気付いたように、辺りを見回した。

　私はこちらと目が合いそうになって、慌てて身を隠す。

　Ｂ子は、切せつ羽ぱ詰まった表情のまま茂しげみの中にビニール袋を捨てると、足早に公園の出口のすぐ前の家の方へと走って行った。

　……一体、何を？

私はＢ子が先程物を捨てていたあたりを探し、茂みの中のビニール袋を拾い上げた。

中を見ると、そこには一冊の本が入っていた。

いかにも古そうで、真っ黒な表紙の本、そしてそこには栞しおりが挟まっている。

私はもはや何も怖く無くなっていた。

終焉オワリノ本だろうが、終シユウ焉エンノ栞だろうが、あの猿さるの手があれば、抗あらがうことが出来る。

「……ふふふ、Ｂ子ちゃん。私が、守ってあげるからね……」

ビニール袋ごと、その本を再び茂みへと投げ込む。

そして、しばらくの間Ｂ子の家の前に立ち、Ｂ子の部屋のであろう窓を、じっと、じーっと眺めていた。

三日目も同じように学校近辺を徘はい徊かいし、最後にＢ子の家の前で立ちすくんだ。

四日目、私は少しだけ遠出してショッピングモールへと来ていた。

もうこのあたりになると、殺人事件なんてどこへやら、生徒達たちもやることがなくなったようで、モールへと遊びに来ている生徒も少なくないようだった。すでに数人、知ったような顔を見かけた。

特に何が欲しいというわけではなかったのだが、お気に入りのリボンと靴を履いて、モールの中を散策する。

歩いている最中ふと視線をやると、メガネ・コンタクトレンズ屋の広告が目に入った。

【カラーコンタクトでお気に入りの瞳に！】

　安っぽいカラーコンタクトには興味がなかったが、そういえばＢビー子コの瞳は、まっすぐで綺き麗れいな色だったなあと思い出す。

　そして、先程偶ぐう然ぜん見かけたＢ子のクラスメイトが、Ｂ子と廊ろう下かで話をしていたのも同時に思い出していた。

『ねーほらほら一緒でしょ～？』

『あ、ホントだねー』

『いえーい！　私Ｂ子と瞳の色がおそろーい』

『瞳だけじゃね～』

『あはは！　ひっどーい』

　お揃そろいの瞳か………………いいな。

　パキッ！

「キャアアアアアアアアアアアアアア！」

　突とつ如じょとしてショッピングモールに悲鳴が響き渡る。

　何事かと思い騒ぎがあった方に近づいて行くと、モール吹き抜けの上部の照明器具が下に落ちてしまった事故だとわかった。

　落下地点には、先程思い出していたＢ子のクラスメイトが居る。

　そして……目のあたりを押さえて叫んでいた。

　辺りには血なのか、少しの赤くて粘度のありそうな水すい滴てき

が垂れている。

　私は慌てて化け粧しよう室しつに行って鏡を見た。

　──そこには、Ｂ子とお揃いの、綺麗な綺麗な瞳が映っていた。

　次の日、私はいよいよ最後のお願いを実行するために、Ｂ子の家へと向かった。

　私は昨日の事件で思い出したのだ、Ａエー弥ヤが言っていた、猿さるの手のストーリーを。

猿さるの手は万能だ、しかし、金きんを望めはどこかから金が消え、水を望めばどこかから水が消える。命もそう。要は交換の機能しか果たさない、万能だが有限のアイテムなのだ。

　Ｂビー子コと私が助かるためにはどうすればいいか、今の状況をＢ子に話して協力してもらわなきゃ。大丈夫、Ｂ子だったらきっとわかってくれる。

　私は唇くちびるのあたりを恍こう惚こつとした表情で撫なでると、そう自分に言い聞かせて家を出た。

　Ｂ子の家へと着く。私はチャイムを鳴らしてみた。

　──ピンポーン。

　出ない。

　──ピンポーン。

　……何をやっているの？

　──ガチャ！　ガチャ!!　ガチャガチャガチャ!!

　──ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

　ねえＢ子……居るんでしょ？　知ってるんだよ？

…………ガチャ!!

私は焦っていた。この猿さるの手は危険。つい願いたくなる魔力があるに違いない。このままではどんどんエスカレートしてしまう。だから早くしないとダメ。Ｂビー子コ、あなたを助けに来たんだよ？　ねえ、なんで出ないの、なんで出ないの、なんで出ないの、なんで出ないの、なんで出ないのおお!?

私はドアノブを壊れるのではないかという程激しく動かしていた。

「……ひっ!!」

──ドンッ。

ガチャ……。

──今、確かにＢ子の声と、倒れる音が聞こえた。

「……………なんで出ないの？」

私は気が気じゃなくなってドアを激しくノックし、ドアノブを開けようとした。

「Ｂ子！　Ｂ子!?　開けてよ！　開けてよおおおおおおおおおお!!」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン!!

「なんで出てこないの？　ねえ？　なんで？　ねえ！　ねえええええ!!」

私は庭に回り込むと石でガラスを突き破る。

ガシャン!!

Ｂ子はどこ？　どこに行るの!?

部屋の中に入りノイズの五月蝿うるさいテレビを叩たたき落おとす。

静せい寂じゃくが訪れた部屋の中でＢ子のか細い声が聞こえる。

「たすけてよぉ………………………」

大丈夫、私が今助けてあげるからね！

「…………………………………………………………………………………………Ａエー弥ヤぁ……」

Ａエー弥ヤ？

知ってる。私は、Ｂビー子コがずっと誰を見ていたかなんて知ってる。

でも、そんなの……。

そんなの、Ｂ子じゃない。

　──がっ！

　私は布団ふとんを剥はいでＢ子の顔を至近距離から覗のぞき込こむ。

　怯おびえる姿は想像よりもずっとリアルで、私が思い描いていたような姿じゃなかった。

　──目の前のコレはＢ子じゃない。

　私が、私が完かん璧ぺきなＢ子になってあげる。そして、Ｂ子を助けてあげる。

　──パキッ！

　私は、さっきまで私だったものから、少しだけ距離を置いて、優しい口調で告げた。

「……私があなたを守ってあげる」

　そして手にしたハサミを大きく上に掲かかげた。

——そう、私が知っている、理想のあなたを、守ってあげる。

猿さるマネ椅い子す盗とりゲームⅣ　□勝者は？ー

　━━私は完かん璧ぺきだ。

「Ｂビー子コちゃんって、カワイイよね！」

「ね～アイドルみたいにスタイルもいいし」

「それに頭もいいし、性格もいいし……ホント憧あこがれちゃうなあ～」

「えー……そんなことないって……」

「そんなことあるよ！」

「運動神経だっていいしさ！　部活入ってないのもったいないよ～」

「うーん……部活やってる人に比べたら全然だよ」

「そんなことないって。それに、男子にもすっごい人気だし」

「ねー！　でもＢ子だったらわかる～」

「私が男子でも告白するもん」

「あはは」

「で、で、誰か好きな人とか、付き合いたい人とか居ないの？」

「う～ん……そういうのよくわかんないからな……」

「えーつまんなーい」

「でもまあ、正直Ｂ子レベルの女の子と付き合える男子なんてそうそう居ないかもね」

「言えてる」

「とにかく、何か好きな人とか出来たら教えてよね！　絶対！」

「うん。大丈夫だよ」

「約束だよ～！」

「絶対ね！」

「あ、やばい、もう授業始まるよ」

　──そう、私は完かん壁ぺきだ。

　完璧な……『ニセモノ』だ。

　クラスメイトの一人が私に小走りで近づいてくる。

「……あ、ねえねえＢビー子コ」

「なあに？　まだなにかあった？」

「……う～ん、たいしたことじゃないんだけど……」

「……ん？」

「あ、うん……あのね……」

「？」

『…………Ｂ子、もしかしてシャンプー変えた？』

　私はにっこりと微笑ほほえむと、「うん、素敵な香りでしょ？」と答えた。

　──放課後、私はあの図書館に足を運んだ。

　結局私は４つ目の願いでＢ子自身になった。

　そして、最後の願いで私に降りかかるはずの災いが無くなるようにとお願いした。

　……これですべてがうまく行く。

　私はこれまでに感じたことがない多幸感に包まれていた。

　思えばリリカに恋した時から、私は憧あこがれの人に近づきたい欲求が強かったのだろう。

　唇くちびるの辺りを指でなぞりながら、頬を染める。

　髪の毛をいじりながら、お気に入りの金きん木もく犀せいの香りを嗅いだ。

『……臭いのよね……』

　!?

　突とつ如じよすぐ背後から声が聞こえた。

　聞き覚えのある、あの声だった。

　……どうして？　なぜあなたがそこにいるの？

　□□Ｂ子!!

『知ってる？』

「……え？」

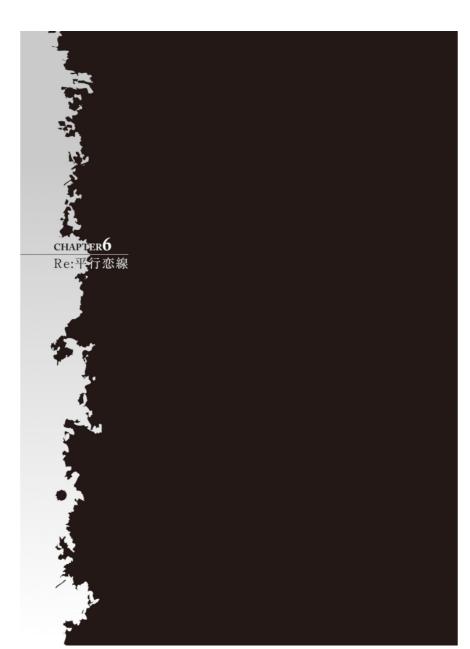
『ドッペルゲンガーを見た人は、死んじゃうんだって』

　━なぜ？　なぜ……なの？

　　　＊

　誰もいない旧校舎で、ノイズ混じりのテレビが歌う。

『あなたの願いはすべて叶かなえられました。あなたに降りかかるはずの災いはすべて無くなっています。そしてあなたは憧あこがれの人に成り代わり、憧れの人のすべてを手に入れました。……そ

う、憧れの人の、災いも、不幸も……。なりすましには、十分ご注意ください』

CHAPTER 6
Re:平行恋線

CHAPTER6

　ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ……

　あとひとつ、あとひとつ。

　まだ大丈夫、まだ大丈夫。

　あと少し。あと少し。

……そうして積み石は崩れ落ちた。

CHAPTER 7
平凡な日常

制作者:?

CHAPTER7

『……あーあ、これもまた、壊れちゃった』

それは、ある日の放課後のことだった、Ａエー弥ヤは、クラスメイト達たちが部活だのなんだのに向かう中、帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　一階の渡り廊ろう下かから、裏庭を抜け、少し外れた所に旧校舎がある。

　老ろう朽きゅう化かが進み、今はほとんど使われていない二階建ての木造建築物。

　その二階にある元音楽室の扉とびらを開くと、そこにはすでに普段と変わらぬ顔が揃そろっていた。

「……やあ」

　Ａ弥は何食わぬそぶりで机の一つに荷物を置いた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　怒りを必死に抑えるような表情でＡ弥に睨にらみ寄ってくるのは、学校でもトップクラスの美少女であるＢビー子コ。

　普段は清せい楚そでおとなしくて、誰にでも人当りがいい彼女だが、この教室の中ではそんなことはなかった。

「ほうら、火の無い所には煙けむりは立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっと偽者だと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「──でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ａ弥の胸倉を掴つかもうとするＢ子に向かって、そんな素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

　長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、「根暗」そうな印象を受ける。

　──彼女の名前はＤデイー音ネ。

　いつもの面子の一人だ。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　Ｄ音は屈くつ託たくの無い笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　しかしＢ子は「やれやれ」という表情で、先程まで自分が座っていた椅い子すへと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤ音に弱いね」

「うっさい」

　ニコニコとした表情で彼らの掛け合いを眺めていたＣシー太タが、話に割り込む。

　色素が薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂れ目。

　おそらく「イケメン」の部類に入るであろう彼は、人を茶ちゃ化かすのがとてもうまかった。

「Ａエー弥ヤだって、何も無意味な嘘うそをついたわけじゃないじゃないか」

「そうですよ、私達たちの活動趣しゅ旨しに非常に合ってると思います」

「活動趣旨とか……そんな大たい層そうなもんじゃないでしょうが」

　そう、一見バラバラでまとまりがなく、共通した目的など持って

いないような彼らだが、実はある同好会のメンバーなのである。

　━━その同好会とは、オカルト研究同好会……通称「オカ研」だ。

　彼らの活動の内容は、この学校に存在するあらゆる噂を収集し、研究することだった。

　噂……といってもその内容はほとんどがオカルトや都市伝説に分類されるものだ。

　やれ括〝口裂け女〟だの、〝人じん面めん犬けん〟だの……。

　そういった噂うわさ話ばなしを語り合ってるうちに、次第にこの旧校舎へと集まるようになり、この同好会が出来上がった。

　部長（正式には同好会なので会長だが）はＡ弥。

　普段クラスではどちらかというと根暗な生徒のように見えるが、ひとたび旧校舎のこの教室へと入ると、熱ねつ弁べんをふるう、真のオカルトマニアだった。

　Ａ弥はさっそくこの日の活動内容について語り始める。

「ズバリ！　今日のテーマは小さいおじさんの捜索だ！」

　黒板には「小さいおじさん」と大きな文字で書かれている。

「……はあ？　小さいおじさんって？」

　Ｂビー子コが不満気な表情で問いただしてきた。Ａ弥はその反応に小さく「フフフ」と微笑ほほえむ。

「はーい、小さいおじさんって、あの小さいおじさんですか？」

　Ｄデイー音ネがまるで授業のように手を上げて発言する。Ｃシー太タがそれに補足するように続けた。

「古くは童どう話わの世界から語かたり継つがれているよね。夜寝ていると小さな妖よう精せいが仕事を終わらせていてくれたとか。今ではテレビでもタレントが見た見たというもんだから、都市伝説としては十分有名だと思うけど……」

「その小さいおじさんがこの旧校舎で目撃されたという噂を、つい

先日手に入れたんだ！」

　指をビシッと立ててそう宣言するＡ弥。

「ん～？　詳しい話を聞かせて」

「お！　Ｂ子！　興味を持ってくれた!?」

　Ａ弥はＢ子の手を握ってブンブンと振る。Ｂ子は耳まで赤面してその手を振り払った。

「ととと、とりあえずは、話を聞いてからよ！」

「あはは、Ｂ子ったら顔が真っ赤」

「Ｂ子ちゃんったら、かわいいですね」

「ちょっ！　何言って、ち、違うからね!?」

　そんな、平へい穏おんな日常。平穏な日常。平穏な…………………………………………ペラッ。

それは、ある日の放課後のことだった、Ａエー弥ヤは、クラスメイト達たちが部活だのなんだのに向かう中、帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　一階の渡り廊ろう下かから、裏庭を抜け、少し外れた所に旧校舎がある。

　老ろう朽きゆう化かが進み、今はほとんど使われていない二階建ての木造建築物。

　その二階にある元音楽室の扉とびらを開くと、そこにはすでに普段と変わらぬ顔が揃そろっていた。

「……やあ」

　Ａ弥は何食わぬそぶりで机の一つに荷物を置いた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　怒りを必死に抑えるような表情でＡ弥に睨にらみ寄ってくるのは、学校でもトップクラスの美少女であるＢビー子コ。

　普段は清せい楚そでおとなしくて、誰にでも人当りがいい彼女だが、この教室の中ではそんなことはなかった。

「ほうら、火の無い所には煙けむりは立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっと偽者だと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「――でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ａ弥の胸倉を掴つかもうとするＢ子に向かって、そんな素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

　長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、「根暗」そうな印象を受ける。

　――彼女の名前はＤデイー音ネ。

　いつもの面子の一人だ。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　Ｄ音は屈くつ託たくのない笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　しかしＢ子は「やれやれ」という表情で、先程まで自分が座っていた椅い子すへと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤ音に弱いね」

「うっさい」

　ニコニコとした表情で彼らの掛け合いを眺めていたＣシー太タが、話に割り込む。

　色素が薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂れ目。

　おそらく「イケメン」の部類に入るであろう彼は、人を茶ちゃ化かすのがとてもうまかった。

「Ａエー弥ヤだって、何も無意味な嘘うそをついたわけじゃないじゃないか」

「そうですよ、私達たちの活動趣しゅ旨しに非常に合ってると思います」

「活動趣旨とか……そんな大たい層そうなもんじゃないでしょうが」

　そう、一見バラバラでまとまりがなく、共通した目的など持って

いないような彼らだが、実はある同好会のメンバーなのである。

　━━その同好会とは、オカルト研究同好会……通称「オカ研」だ。

　彼らの活動の内容は、この学校に存在するあらゆる噂を収集し、研究することだった。

　噂……といってもその内容はほとんどがオカルトや都市伝説に分類されるものだ。

　やれ〝口裂け女〟だの、〝人じん面めん犬けん〟だの……。

　そういった噂うわさ話ばなしを語り合ってるうちに、次第にこの旧校舎へと集まるようになり、この同好会が出来上がった。

　部長（正式には同好会なので会長だが）はＡ弥。

　普段クラスではどちらかというと根暗な生徒のように見えるが、ひとたび旧校舎のこの教室へと入ると、熱ねつ弁べんをふるう、真のオカルトマニアだった。

　Ａ弥はさっそくこの日の活動内容について語り始める。

「ズバリ！　今日のテーマは小さいおじさんの捜索だ！」

　黒板には「小さいおじさん」と大きな文字で書かれている。

「……はあ？　小さいおじさんって？」

　Ｂビー子コが不満気な表情で問いただしてきた。Ａ弥はその反応に小さく「フフフ」と微笑ほほえむ。

「はーい、小さいおじさんって、あの小さいおじさんですか？」

　Ｄデイー音ネがまるで授業のように手を上げて発言する。Ｃシー太タがそれに補足するように続けた。

「古くは童どう話わの世界から語かたり継つがれているよね。夜寝ていると小さな妖よう精せいが仕事を終わらせていてくれたとか。今ではテレビでもタレントが見た見たというもんだから、都市伝説としては十分有名だと思うけど……」

「その小さいおじさんがこの旧校舎で目撃されたという噂を、つい

先日手に入れたんだ！」

　指をビシッと立ててそう宣言するＡ弥。

「ん～？　詳しい話を聞かせて」

「お！　Ｂ子！　興味を持ってくれた!?」

　Ａ弥はＢ子の手を握ってブンブンと振る。Ｂ子は耳まで赤面してその手を振り払った。

「ととと、とりあえずは、話を聞いてからよ！」

「あはは、Ｂ子ったら顔が真っ赤」

「Ｂ子ちゃんったら、かわいいですね」

「ちょっ！　何言って、ち、違うからね!?」

　そんな、平へい穏おんな日常。平穏な日常。平穏な…………………………………………ペラッ。

それは、ある日の放課後のことだった、Ａエー弥ヤは、クラスメイト達たちが部活だのなんだのに向かう中、帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

一階の渡り廊ろう下かから、裏庭を抜け、少し外れた所に旧校舎がある。

老ろう朽きゅう化かが進み、今はほとんど使われていない二階建ての木造建築物。

その二階にある元音楽室の扉とびらを開くと、そこにはすでに普段と変わらぬ顔が揃そろっていた。

「……やあ」

Ａ弥は何食わぬそぶりで机の一つに荷物を置いた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪趣味はいいけどさ、人のことネタにするのいい加減やめてくれる？」

「……なんことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

怒りを必死に抑えるような表情でＡ弥に睨にらみ寄ってくるのは、学校でもトップクラスの美少女であるＢビー子コ。

普段は清せい楚そでおとなしくて、誰にでも人当りがいい彼女だが、この教室の中ではそんなことはなかった。

「ほうら、火の無い所には煙けむりは立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗じよう談だんを言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶ぐう然ぜん誰かが見たら、きっと偽者だと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「──でも、Ｂ子ちゃんはその二面性も含めて、素敵だと思います」

　Ａ弥の胸倉を掴つかもうとするＢ子に向かって、そんな素すっとん狂きような言葉が飛んでくる。

　長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、「根暗」そうな印象を受ける。

　──彼女の名前はＤデイー音ネ。

　いつもの面子の一人だ。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うたがうレベルだと思いますよ」

　Ｄ音は屈くつ託たくのない笑顔でとんでもないことを言い放つ。

　しかしＢ子は「やれやれ」という表情で、先程まで自分が座っていた椅い子すへと戻った。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤ音に弱いね」

「うっさい」

　ニコニコとした表情で彼らの掛け合いを眺めていたＣシー太タが、話に割り込む。

　色素が薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂れ目。

…………………………………………………………………………………………
ペラッ。

それは、ある日の放課後の事だった、Ａ弥は、クラスメイト達たちが部活だのなんだのに向かう中、帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。……パタン。

違う！！！

コンテニューしますか？

YES／NO

あとがき

　初めましてから、「あらやだ！　大きくなっちゃって！　前に会ったのは六歳の時かしらブッフォ」なんて親戚が集まる席でテンションあげちゃうおばちゃんまでこんにちは。

　スズムです。

　昨年の五月からみんなで作り始めた世界「終シユウ焉エンノ栞シオリ」ですが、ついに小説になってしまったようです。

　これを書くことが決まった時、お母さんに「小説書くことになったよ！　メディアファクトリーってとこだよ！　頑張るね！」なんてメールを送ったのが懐かしいです。

　ちなみに母からの返答は「お姉ちゃんの分のパエリアおばあちゃんの家にあえて置いといたから!!　よろしく!!」でした。

　宛先間違えた誤送の上に、普段おばあちゃんに対して苦手意識を持つ姉のトラウマ改善を謀ろうとする母のちょっとした愛のある計画を実家静岡県磐田市から２５０Ｋｍ先の東京で感じホームシックになりました。

　さて、ここで一つ問題です。

　そうなんです。おもむろに身内の話をしてましたが、もう既に書くことがありません。

　いや、お前の問題の話かよって思われそうですがこれは由々しき自体です。

　小説を書き始めてここまで筆が進まなかったことはありません。

　だから無む駄だに改行を多くしています。

　うん。

無駄に。

　多くしております。

　うん。

　ごめんね。

　そして、僕は閃きました。あとがきの歴史上最も下劣で最悪な手。僕は今後あとがきブラックリスト入りするかも知れません。そう。

「担当者をＳＮＳで売り話題をもらう」ということです。

　例えるなら、プロ野球選手が九回裏二死満塁でホームランを打ちたいから近所でもいろいろやばいと評判の終しゆう焉えんノ詩し織おりさん（98歳／仮名）にお金を払って登板してもらうくらいの汚さではあると思います。

　わけわからんくなった。

　　　＊

　で、ある時実行をしてみました。

　それは、もう（個人的主観では）大盛況だったのですが詳しくは、あまり語れなくなってしまいました。（普通に怒られた）。

　ので、よろしかったらツイッターをやっている貴方ＩＤ検索でｓｕｚｕｍｕｎで検索してみてください。いつぞやの朝方のツイートがまさにそれです。

　知ってる方だけになって申し訳ないのですが、僕は生○ポンデ（伏せ字にしろって言われました）は実際食したところすごく好きでした。近所に某ドーナッツ店があるので、今後も精力的に通い詰め、より生○ポンデの味の神秘と秘訣の解明に尽くしたいと思いま

す（名前出すなら褒ほめろって言われた）。

　まとめ：大人の事情って怖いね

　　　＊

　さてさて、おかげさまで悪ふざけのみでページがほとんど埋まったので最後だけ真面目なことを書き殴っておきます。

　今作「終シユウ焉エンノ栞シオリ」を手に取っていただきありがとうございます。（立ち読みの奴やつらは店員に睨にらまれて怒られてちょっと恥ずかしい思いしろ）

　結論から申しますと、現状この物語は完結していないのはここを読んでいる貴方ならもう分かりますよね？

　そして最後の最後で尻尾を見せた狐は『誰』なのか。勘違いが勘違いを生む負のスパイラルが僕は大好きです。

　一つだけ僕からヒントを。『貴方は既に狐を見ています』本の奥行きや世界に捉われずにもう一度、一文字一文字を「見て」「感じて」「想像して」ください。貴方が主人公なら分かるはずです。

　最後に、もう一度教えてください。

　貴方はコンテニューしますか？

スズム

あとがき
こみね
小説発売おめでとうございます！
今回、挿絵とか書かせて頂きましたありがとう
ございます！大変ごめい惑おかけしてゲザー祭りを
(土下座)
担当さんにさせてしまいました。もう、お世話になりすぎて
感謝しきれないです。余談ですが、担当さんⓎさんが●もらしい
ので、その謎もぜひ解き明かしたいです。
サーモン!!!
食べちゃうゾ♡
もんじゃ焼き!!!!
!!
ビビビビッ
P.S
A3すごく書くのニガテです。
C太とB子ラブ☆

あとがき。
終焉ノ栞小説
発売おめでとう
ございます!!
キャラデザとか
表紙とか口絵とか
色々やらせて頂き
ましたがA弥君は何回
描いても描き慣れません
でした…。B子ちゃんが
一番描きやすいです。あと今
無性に
食べ
鶏の水炊きが
たいです。
さいね

お祝いコメント
小説発売おめでとうございます!!
@わんにゃんぷー
C太
C太ラブ
150Pさんとスズムさんの作った曲とさいはなさんとこみねさん、空さんの動画が大好きです!!
怖い話大好きなのでガクブルしつつも読んでます
これからも頑張って下さい!!
小説化おめでとうございます!!
@空
総長P
突然ですが気になることが!!
C太君は小さい頃、うさぎのぬいぐるみに何て名前をつけていたのですか!?
○弥ですか!?○弥ですよね!?
今日も気になって眠れません。
教えて下さいお願いしますっっ

終焉ノ栞小説化
おめでとうございます!!
ずっと応援していたプロジェクトなので
小説化 嬉しいです♡
制作おつかれさまでです!
これからも楽しみにしてます!
Tama
終焉ノ栞小説化
おめでとうございます!
終焉ノ栞プロジェクトは
いつも新作を楽しみに
してます!小説を読むの
とても楽しみです♡♡
B音ちゃん
好き!
natsuko
終焉ノ栞 小説化
おめでとうございます!!
近くで見ていたところもあり
なんだかうれしいです。
ファンとして楽しませてもらいます。
何もしてないけれど主犯です!
どうもありがとうございました!!!
小説面白いよ 150P
マウスでかいた
B子ちゃん
そらる

著者

スズム

　「主人公の名前決めてください」

　「ああああああああああああ」

イラストレーター

さいね

　色彩豊かなデザインセンスを持ち。終焉ノ栞のキャラデザ担当。

　本プロジェクトの一番のしっかり者である。お酒好き。

イラストレーター

こみね

　作画・動画制作等、「終焉ノ栞」のビジュアル周りを担当する絵師。

　「終焉ノ栞プロジェクト」の一番の理解者。こむねじゃないよ。

主犯

ああああああああああああ（１５０Ｐ）（わんはーふぴー）

　チャンス×

　アンラッキー◎

ギャクセンス×

女運×

「ＴＨＥ　ドンマイ」

カバー・口絵／さいね

カバー・本文イラスト／こみね

主犯／１５０Ｐ

装丁／團夢見